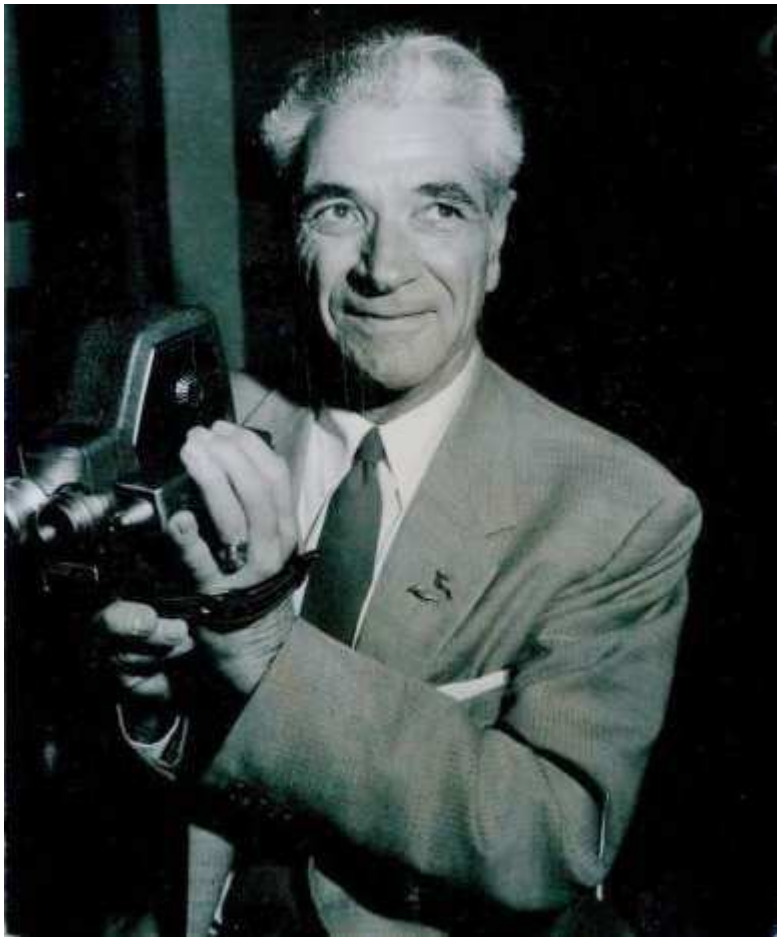
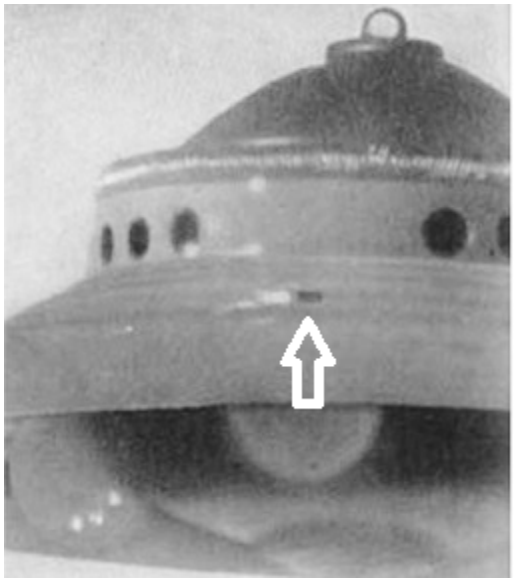
ロドファーフィルムの検証

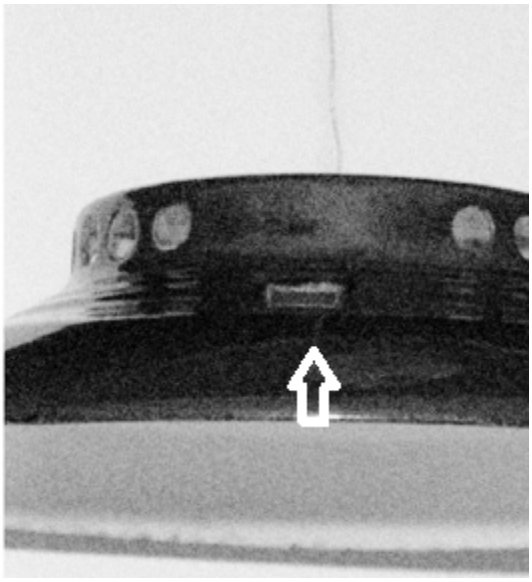
益子祐司



８ミリ映写機を手にするジョージ・アダムスキー。この映写機が彼のＵＦＯフィルム撮影に使用されたかどうかは不明。

自著や過去のニューズレターにおいて、アダムスキーが１９５２年に撮影したという円盤の至近距離での写真が、１９３０年代からあるランタンを利用した模型であることがほぼ確実だと思われることを私は公表しました。





ランタンの取っ手（ハンドル）を取り付ける穴の位置が、ほぼ完璧に一致していますので、残念ながらランタン利用はほぼ１００％間違いないでしょう。
このランタン利用の指摘に対して、アダムスキー信奉者の人たちは、「完全に一致しているわけじゃないから意味がない」「宇宙船を過去に目撃した人が、それをヒントにランタンを作ったのだろう」等と弁明しますが、それはかなり苦しい釈明でしょう。
なかには平然として、「まあ、ちょっと面白い類似点だね。似たようなものがあと何個

も見つかったなら、偽造を疑ってもいいかもしれないけどね」「あなたの検証も、まったく無意味というわけではないでしょう。どこかにいるアダムスキーはきっと微笑ましく見ていますよ」などと、あえて余裕を見せるベテラン信奉者の人達もいました。

通常なら　―　つまり、世間一般の良識ある見方としては　―　このようなニセモノ写真で自身の体験談を語るアダムスキーの話は、すべて作り話（嘘）であるだろうと考えるのがごく普通であると思います。実際に国内外を問わず、ランタンの件が知られる何十年も前から、〝ペテン師〟というのが、世間からみたアダムスキーに対する見方となってきています。そしてそれでも彼を支持する者たちは、盲目的な信者たちでしかないとみなされています。

しかし私の見解では、ハワード・メンジャーが宇宙船や異星人との遭遇の直後に、政府から接触を受けて、一般大衆の反応を見る実験に参加することを半ば強制的に了承させられたという証言や、アダムスキーと活動を共にしながらも、裏切り者の濡れ衣を着せられて追放された元側近のキャロル・ハニーが目的した未公開写真（おそらく政府の圧力によって公開を禁じられたもの）や、アダムスキーとは無関係の第三者機関によって彼の体験の真実性が認められていたというハニーの証言から、アダムスキーもメンジャーと同様に、政府から何かしらの〝資料〟の提供を受けていた可能性があるのではないかと推察しています。その中に円盤の近接写真が含まれているとしたら、ランタンを用いた模型を作ったのも政府関係者である可能性が出てきます。

ただ、それだけの推測でアダムスキーの体験には信憑性があると考えるのは正直なところ若干の無理があり、私個人が彼の主張の中核を支持する根拠としては、彼が亡くなる２ヵ月ほど前の１９６５年２月に撮影した８ミリフィルムに映された円盤が、本物である可能性がいまだに高いと思っていたことがありました。それはアメリカ西海岸在住のアダムスキーが晩年に知り合った東海岸在住のマデリン・ロドファー夫人（故人）宅の前でアダムスキー本人が撮影した円盤の動画です。下の写真は自宅前の夫人です。

自宅の前の撮影現場。フィルムに写っている林の形と比較すると同一場所だということが判る。

1965年２月26日の静かな午后、自宅で家事をしていたロドファー夫人は、ふと、自宅前の林の上を飛び廻るＵＦＯに気付いた。あわてて、愛用の８ミリカメラをひっつかみ、表にとび出した夫人は、自宅の前庭から、ズームレンズを使って夢中で撮影した。

◀木の葉の落ちるようにヒラヒラと下降したり前後左右に急激に動いたりを、10分近く繰り返した後飛び去ってしまった。

マデリン・ロドファー夫人。

この８ミリ映像は、撮影した場所にちなんで、人々の間ではロドファーフィルムと呼ばれることが多く、事情を知らない否定派の人たちは「ロドファーフィルムは実はアダムスキーが撮影していたもので、友人の名前を借りただけだった！」と、あたかも不正を暴くかのような、見当違いの批判をしてきています。

夫人によれば、当時アダムスキーは東海岸での講演のために、夫人宅に滞在していて、円盤を撮影した当日の朝に、異星人の男性たち(スペースブラザーズ)が夫人宅を訪れ、これから宇宙船がやってくるので撮影の準備をするようにと告げたといいます。そして実際に偵察型の宇宙船（いわゆるアダムスキー型ＵＦＯ）が飛来してきて、買ったばかりの８ミリビデオカメラの扱いに慣れない夫人に代わって、アダムスキー本人が撮影したといいます。

ところが、そのフィルムを現像に出したところ、戻ってきたフィルムは劣悪な状態で、幾つかのコマ（鮮明に船体を写したもの）が抜き取られていて、代わりに帽子を写した映像が挿入されていたといいます。抜かれたコマにどれほど鮮明に写っていたのかは不明ですが、夫人が肉眼で目撃した円盤は、紫に近い青色で、とても美しく、丸窓には人影のようなものが見えたといいます。

実際の映像は、下記のユーチューブ動画の３分過ぎごろから見られます。別のサイトで抜粋動画も見られます。

https://www.youtube.com/watch?v=un6-YgL0gkM#t=209

https://www.youtube.com/watch?v=LSkfclW6J4I

https://www.youtube.com/watch?v=PU5Db7GvKtI

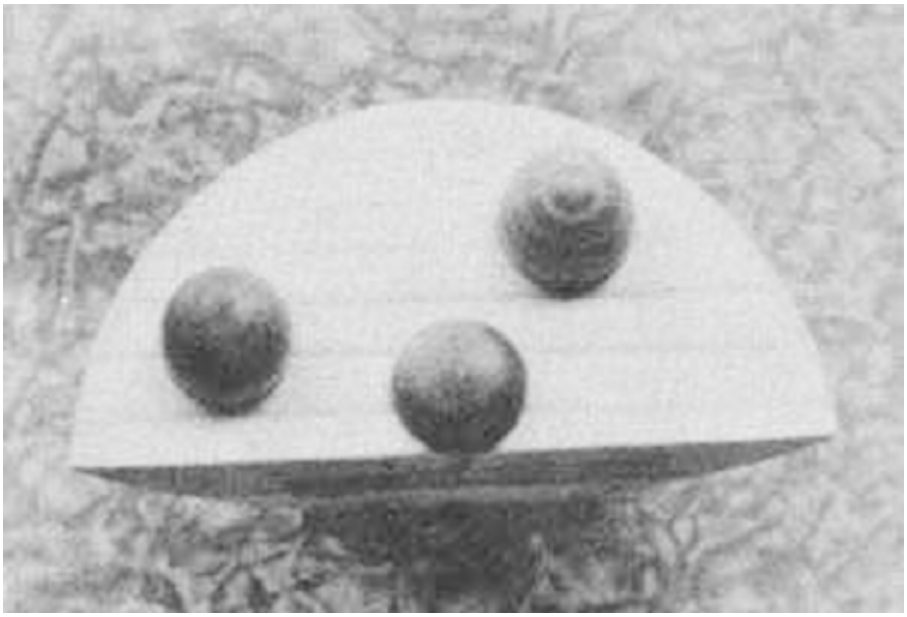
このＵＦＯフィルムの検証については、過去のニューズレターでも肯定派、否定派の見解をご紹介しましたが、まず肯定派の見解としては、フィルムには二重露光などの細工の形跡が見られず、何よりも船体が見た目上は変形しながら動いているのが、船体を取り巻く磁気フィールドの影響である証拠であることが強調され、私もその部分を最も重視していました。同時に、このフィルムを検証したコダック社の光学物理学者のウイリアム・シャーウッド氏は、この物体は（宇宙船であるかどうかは別として)、直径８メートルほどの物体を撮影したものであると鑑定しました。ただ、シャーウッド氏はアダムスキーの熱心な支持者でもありました。

ウイリアム・シャーウッド氏

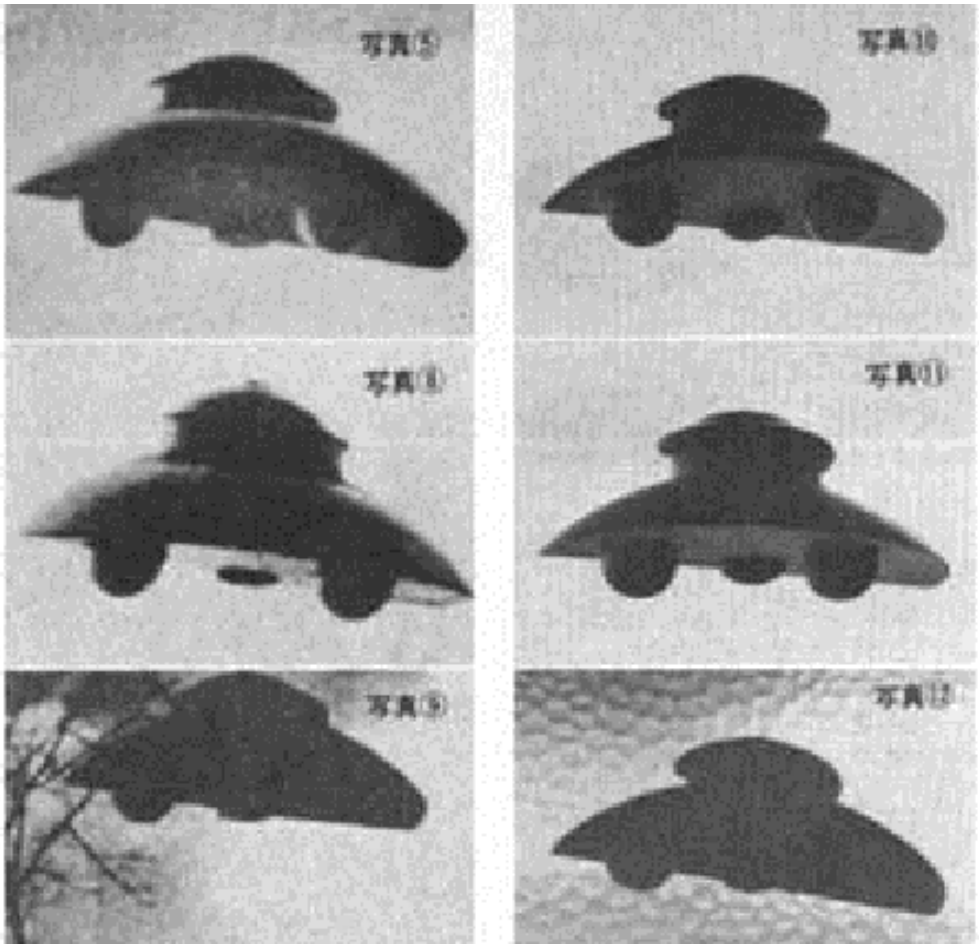
アダムスキー（左）とシャーウッド（右）

いっぽうで否定派は、このフィルムは、半分に切り取った形の円盤模型を透明なガラス板かアクリル板に貼り付けて撮影したものであるという、日本のＵＦＯ研究家の高梨純一氏の模型説を前面に打ち出して、トリックの証拠として、以下のような、高梨氏による模型との比較写真を提示してきました

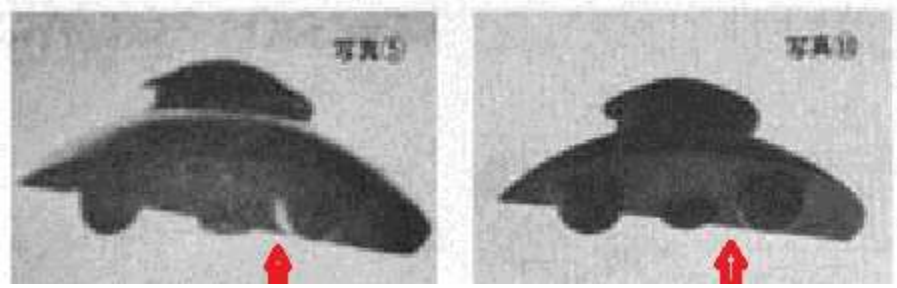
若き日の高梨純一氏



下の写真は、左がアダムスキーのフィルム、右が高梨氏による模型



上の高梨氏の模型説ですが、私の率直な疑問として、なぜ彼もしくは他の人たちが、実際に模型を使ってフィルムを動画として再現してみなかったのかを不審に思ってきました。なぜなら、写真を見た限りでは、模型は模型のようにしか見えなかったからです。右側の最初の２枚は、背後から光のさすアクリルか半透明ガラスの上に置いたか貼ったもののようで、右下のものはガラスの上か、ガラス越しに撮ったものと思われます。意図的なのか分かりませんが、アダムスキーのフィルム（左）と同じように、右下の丸いギアの背後が反射して光って見えます。アダムスキーの写真のほうが明るめです。



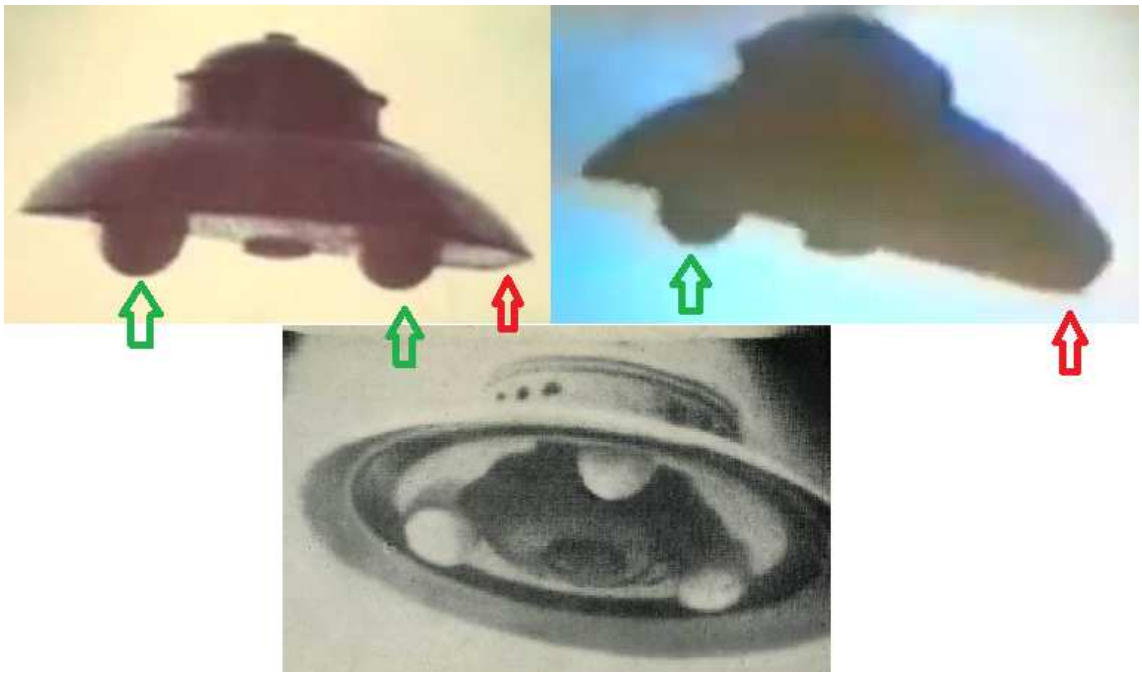
高梨氏の模型写真は、実際に昼間の木立を背景にした再現ではないので、これだけでは屋外撮影のフィルムのトリックの証拠としては不十分に思われましたが、この模型説が写真付で海外にも広まって、ロドファーフィルムのトリックを暴いたものとして有名になりました。いっぽうで、日本の支持者たちは、この模型説に納得せずに、現在までもフィルムの真実性を信じています。ところが、私は２０１５年の７月になって初めて知ったのですが、高梨氏は１９９３年の日本のＵＦＯ番組で、ロドファーフィルムの検証を、アダムスキー派の韮澤氏と水島氏を前に堂々と行っていたのでした。

『徹底検証！ＵＦＯ映像の謎に迫る！』（テレビ朝日）に出演時の高梨純一氏

そこで高梨氏は半分に割れるアダムスキー型ＵＦＯの木製模型を披露し、アクリル板に貼って、その見た目上の形状の一致を淡々と説明し、科学者然とした落ち着いた態度で、トリックであると主張していました。さらに、番組スタッフによる〝再現フィルム〟も製作されていたのです。

特に印象的だったのは、高梨氏が、いわゆる否定派の人たちにありがちな、頭ごなしの否定をせずに、アダムスキー信奉者たちの主張がなぜ誤りなのか、きちんと理由を述べていたことです。特にフォースフィールドによる見かけ上の船体の変形の可能性については、「重力場によってこのような形になるというのは、物理学上ありえない」とする具体的な理由について、船体の右縁の形だけが角ばっていて、その付近の丸い２個のギアがずっと同じ形を保っている点を指摘しました。

以下のように、過去の円盤写真（下側）と比較すれば、不自然に角ばっている輪郭と、丸いままのギアの矛盾が明瞭です。つまり、船体の底面が平らに変形するなら、ギアも下がつぶれた卵のようになるはずです。それ以上に、これらが「貼り付けるために半分に切った切断面」だとすれば、それを見事に示す形状となっていることも分かります。



下の画像は、模型の円盤を半分に割って見せる高梨純一氏

そしてさらに高梨氏は、半分に切断した模型を大きめのアクリル板に貼り付けて、スタジオのセットにある樹木の前で、アクリル板ごと動かして見せています。高梨氏の指摘に対して、アダムスキー派の韮澤氏は、「フィルムの円盤とは、左右のサイズのバランスが少し違う」と反論しましたが、高梨氏は「フィルムと同じように正確に作ってはいないだけのことです」と一蹴しています。
最後に韮澤氏は「フィルムは盗まれてさしかえられてしまっていた」と、あたかもフィルムが偽造であることをほのめかすような釈明をしていました。韮澤氏は番組登場時から、額に玉のような汗をたくさん浮かべていましたので、室温のせいかと思ったのですが、「今日は強敵がいるので・・・」と、かなり緊張した様子でした。

韮澤潤一郎氏

以下は高梨氏がスタジオの木を背景に、アクリル板に貼った模型を動かしている場面です。たしかにフィルムに写っている円盤と同様な見え方をしています。

冒頭に述べましたように、アダムスキーの円盤の接近遭遇の写真（静止画像）がランタンを材料にしたものであることが明白になってから、私のロドファーフィルムへの見方が以前よりも格段に厳しくなりました。肯定派や否定派の見解を考察するだけではなく、自分自身で白紙の気持ちになって検証する必要性を徐々に強く感じ始めたのです。
ただ、ランタンの写真の場合と大きく異なるのは、８ミリフィルムの場合、アダムスキーの真横にロドファー夫人が立っていて、飛来した円盤を肉眼でずっと見ており、そのときの様子をありありと証言した取材映像も残されていることです（日本のアダムスキー支持者が過去に夫人のもとを訪問してインタビューをした記録も残されています）。

つまり、このフィルムが偽造であった場合には、ロドファー夫人が真っ赤な嘘をついていることになるのです。これは、にわかには信じられないことでしたので、このフィルムの信憑性を疑うことは、これまでありませんでした。取材映像等から感じる夫人の様子は、当時の体験をありのままに話している普通の女性にしか見えなかったからです。しかし、ＵＦＯ映像の検証は、ときには冷徹に粛々と行わなければならないものでしょう。そう私が思うようになった背景には、これまで、決して悪い人ではないと思える人たちが、ＵＦＯや宇宙人との遭遇体験に関しては、個人的な事情で作り話をしていたという事例を少なからず見てきたからです。この分野においては、嘘つき＝悪者とは限らないのです。では、フィルムからの抽出画像をご覧いただくことにしましょう。最初は円盤は空の高いところにあり、小さく見えます。そして急に接近映像に切り替わります。

アダムスキー財団のグレン・ステックリング氏は、小さく見える円盤は小型の偵察型ＵＦＯだと説明していますが、夫人はそのようなことは述べておらず、おそらく途中でカットされたフィルムの色合いの違いから、別の日に撮影されたとスレックリング氏が勘違いしているようです。当時幼い子供だったステックリング氏とその父母はロドファー夫人の証言にはまったく登場しませんが、なぜか彼はフィルムを現像に出したのは自分の父だったと主張し、その他の点でも彼の話はロドファー夫人の説明とは大きく食い違っています。

レン

さて、ロドファーフィルムについては、惑星問題の研究家の深沢久夫氏（通称きちさん）という方が検証をサイト上でなさっています。

http://kiti.main.jp/Ufo/rd.htm

深沢氏が画像を解析した結果、フィルムに写っている物体は立体的なものであることが判明したとのことですが、解析するまでもなく、少し明るめの画像を見れば、船体に丸窓のようなものが見え、上部はドーム型で、下部の着陸ギアは球体をしていることが分かります。それよりも、深沢氏の考察の中で、私が特に注目したのは以下の２点です　―

「もう一つ面白いのは、着陸ギアが動作しているように見えることです。
本体が秤動していれば、着陸ギアが出入りするように見えるかも知れません。
もし、秤動であれば本体は左右にふらつくはずです。
しかし、映像では一定の傾きを維持し中心軸も同じ傾きを保っているのです」

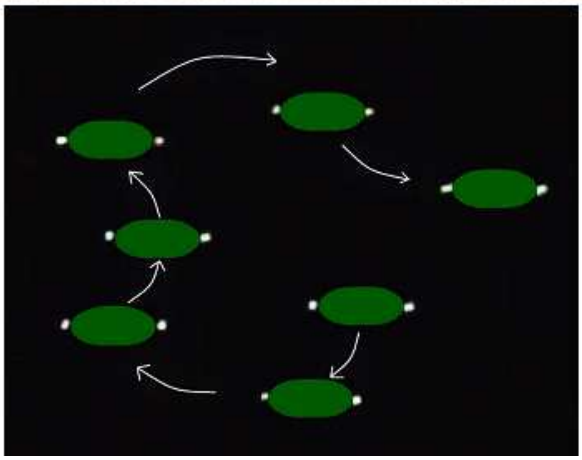
※益子註：秤動（しょうどう）とは、天体が自転・公転する時、回転が完全には一定にならず、ある角度内を振動する現象。釣り合った天秤が揺れ動くように運動するところからいう。

「フィルムの中間あたりで、映像が一瞬フラッシュするように見えます。（中略）
閃光は、まるで爆発があったように右下から現れ上部に拡大していきます。
木立やＵＦＯがシルエットで浮かび上がることから、これはフィルムの感光ではなく、実際に閃光が走ったものであることがわかります。ＵＦＯに伴う現象なのでしょうか」

最初の指摘については、ニューズレターで過去にご紹介した、１９７０年代の日大ＵＦＯ研究会の副会長によるロドファーフィルムの検証記事において、船体の中心軸が常に地面に鉛直になっているとの指摘がありましたが、よく考えれみれば、地面は映像には写っていないので、深沢氏がいうように、「一定の傾きを維持し、中心軸も同じ傾きを保っている」というほうが正確のように思います。これは何を意味しているのか、深沢氏は「答えは不明」とし、底部の球体（ギア）が出入りしているのに、船体はフラついていないことの矛盾を不思議に思っておられます。

手前味噌で恐縮ですが、２０１０年に私が十勝岳で撮影した（２個のライトを付けたＵＦＯと思われる）映像は、ジグザグに動きながらも、船体がフラついているように見えます。

https://www.youtube.com/watch?v=UxvkgtUVIkI

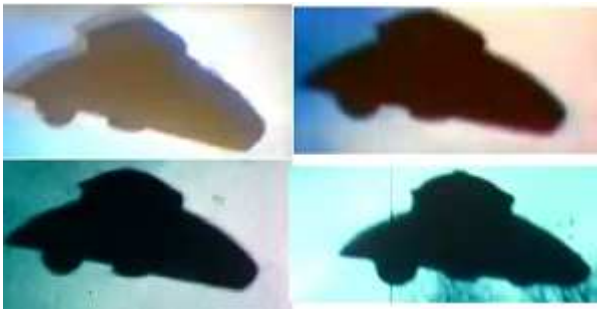


ただ、ロドファーフィルムにおける円盤の飛び方に対する疑いを、先の高梨氏が指摘した、ガラス板かアクリル板に貼り付けた模型を撮影しているという説に当てはまれば、船体の傾きを常に一定を保ちつつ、アクリル板を後ろに傾ければ、あたかも底部の球体が出入りしているかのように見せることができます。また、風景の木々との位置関係は、アクリル板とカメラがどちらも自在に動かせる状況なら、どのようにでも調整可能です。
そして、２番目の指摘である、フィルムの右側の空間に見られる閃光については、ユーチューブの３つの動画を比較したところ、２つの動画では、深沢氏のご指摘のとおり、閃光が右下から上部に移動していったように見えます。

閃光の正体としては稲光も考えられるでしょう。下から上へと移る点も一致しています。ただ、稲妻は写っていないこと、当日の天候や稲光について撮影者たちから特に言及がないことなどが疑問点として残ります。以下は稲光の写真の一例です。

ただ、３つのユーチューブ動画の中では画像が一番良さそうなアダムスキー財団の動画を見ると、閃光は最初は左下、しばらくしてから横から出てきているようにも見えます。正確にいえば、横から出てきた閃光は上のほうが明るく見えます。

もしこの閃光が、模型を貼り付けたアクリル面を後ろに傾けたときの反射だとしたら、日光を反射して一瞬だけ光ったと思われます。また閃光を放った瞬間の船体はいずれも右下のギアが見えなくなっています。これは模型を後ろに傾けた際の見え方と同じです。



ただ、日光なら最初からもっとアクリル板に反射していそうですが、船体の正面が暗く見えることから、正面に近い角度で光は当たっていなかったと推察されます。

高梨氏がスタジオで再現してみせたアクリル板を使った模型の映像では、後ろに傾けたアクリル板に、スタジオのライトが反射しているシーンがありましたが、その際は模型も明るく光っていますので、フィルムとは光の差す角度が違っているようです。
以下はそのときの連続写真です。

ここで気づくべき非常に重要な点が一つあります。それはアダムスキーの８ミリフィルム「逆光ぎみで撮影されているように見える」ということです。正確には画面の左斜め上から射していますが、それはアクリル板の存在を仮定した場合、画面の右下から右上に閃光が走ることの説明にもなりえます。つまり太陽光の反射の角度としての一致です。仮に実際は逆光ぎみではなかったとしても、フィルムから起こしたスチール写真を見ると、光を柔らかく反射した部分は見えても、船体正面の様子はほとんど分からないものばかりですので、少なくとも、まともには日光が当たっていなかったことは確かです。

フィルムはロドファー夫人の自宅の庭先で撮影されたものであるため、日光の方向の調整までは無理だったという解釈も可能かと思いますが、せっかくのＵＦＯビデオが見えにくくなってしまう事態をなんとか宇宙人側は防げなかったのでしょうか。たとえば、飛来する時間を少し変えることによって、太陽の差し込む角度が変わり、船体がもう少し明瞭に照らされるようにはできなかったのでしょうか。

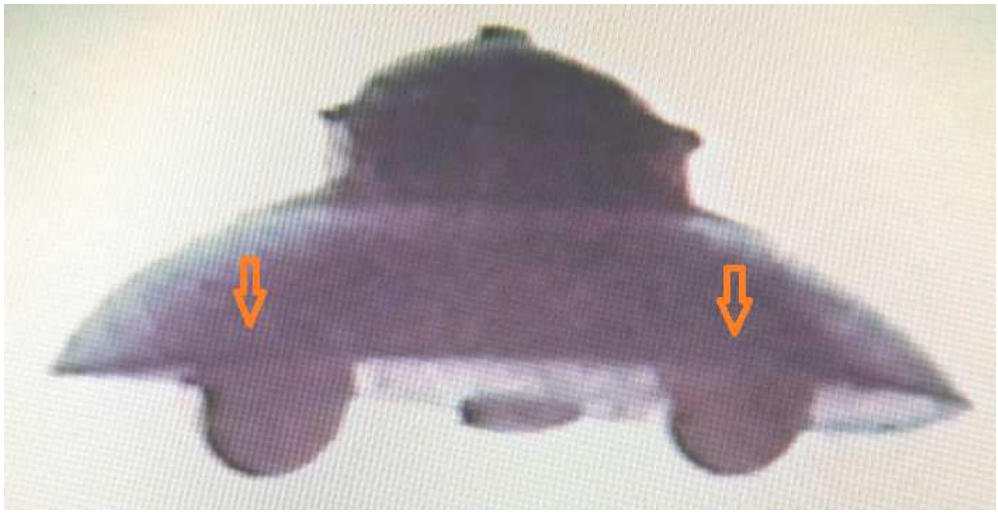
ただし、ロドファー夫人によると、フィルムは現像時に何者かに細工されて、コマの一部が抜き取られていたとのことですので、それが真実なら、あたかも逆光ぎみで撮影したかのような不鮮明な映像に変えられていた可能性を示唆します。ただ、なぜフィルムをそのまま没収しなかったのかという疑問点は残ります。

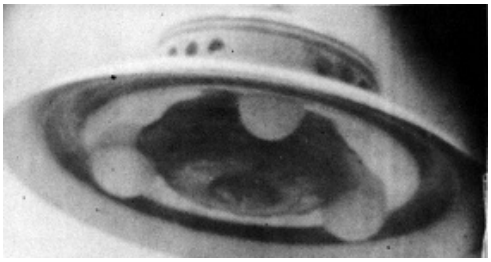
この「逆光ぎみで撮影した」ことへの疑問は、偶然にも、模型をアクリル板に貼り付けた際には、逆に必須の条件となってくるのです。なぜなら、そうすることで、アクリル板に日光が反射することを防げるからです。さらにいえば、明瞭に見せれば模型と分かってしまう円盤の正体を見破られずに済みます。

冒頭でご紹介した１９５２年の円盤写真がランタンを利用したものであると指摘する記事では、船体の軸が垂直ではないことが模型の証拠とされていますが、１９６５年の８ミリフィルムの場合も、軸が垂直ではなく、船体が歪んでいます。これが船体を取り巻く磁気、いわゆるフォースフィールドの影響なら、それは船体の全体に及ぶはずです。

しかしフィルムを見ると、ゆがみは特に右下のスカート（フランジ）部分に顕著に見られます。そしてそれは、半分に切って透明なアクリル板などに貼り付けた円盤模型を前後に傾けた場合の見え方と偶然にも一致しているのです。以下の画像をご覧ください。

また、半分に切った模型を傾けた場合の見え方と同じだけではなく、底辺の真っ直ぐな切断面と似たシルエットも見えます。下の静止画像にあるように、球状のギアの影が船底に反射して写って見えますが、これは１９５２年の写真（その下）に見える底面構造ではありえない反射です。

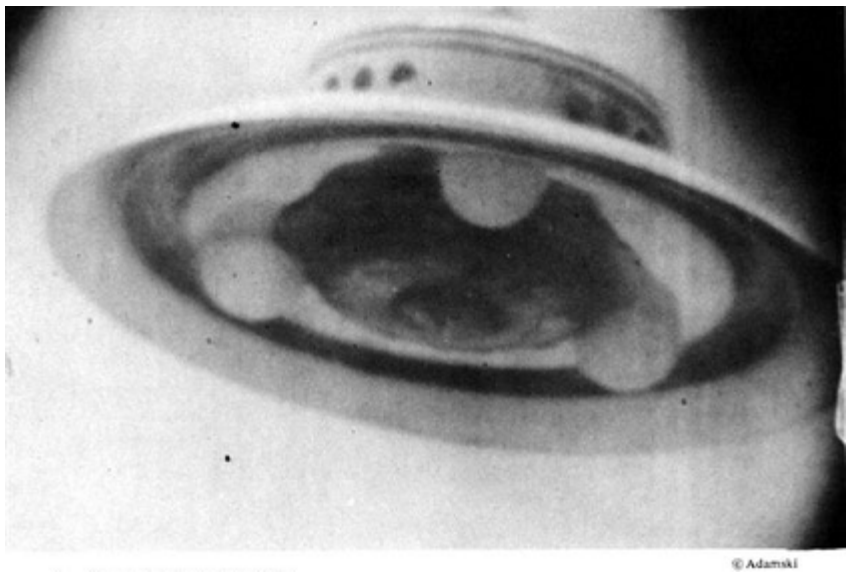


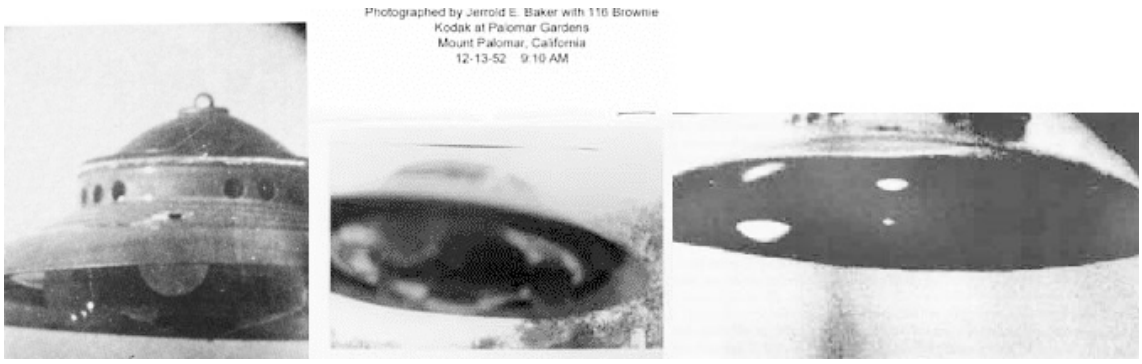


つまり、ロドファーフィルムにおける円盤の船体は、もともと底面が平面であったことを示しているのです。もしフォースフィールドの影響で平面のように見えているだけなら、そこにギアが反射するはずはありません。底面が明るく見えている場面があるのは、アクリル面か背後の白壁からの照り返しでしょうか。

さらに模型貼り付け説を有利にするのは、本来なら３個あるはずの球体の着陸ギアが、なぜかこのフィルムには２個しか写っていないことです。初期の円盤写真とは角度の違いはあるものの、３個目のギアがどの場面でもまったく見えないというのは、他のギアと重なって隠れているという理由では説明がつきませんし、そもそも、もう一個のギアは中央付近に見えるはずです。２個しか見えない妥当な理由としては、船体が半分に切断されているからという理由が最も合理的に思われます。

下の画像は１９５２年にアダムスキーが撮影したとされる円盤写真です。どの写真にも、フォールフィールドによる船体の大きな歪みは見られません。

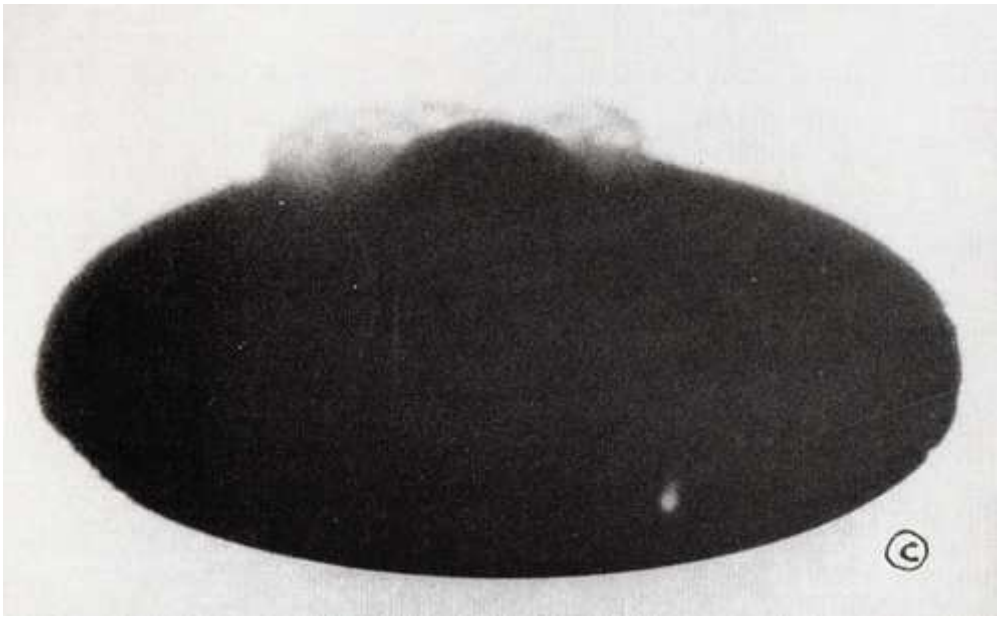




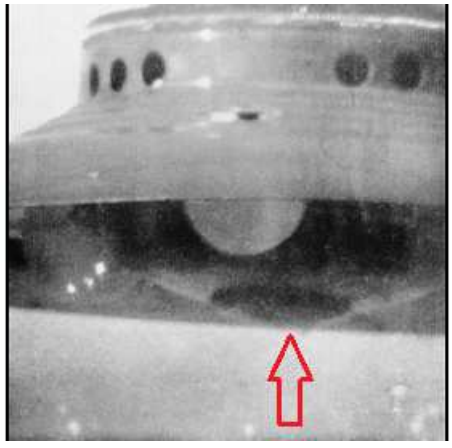
当然ながら、この「着陸ギアが２個しかない」のは、高梨氏が「船体を半分に切った形の模型をアクリル板などに貼り付けた証拠」と主張する重要なポイントのひとつとなっています。もう一個のギアがフォースフィールドの影響で消えてしまっている可能性は、底面の輪郭がある程度はっきりしていることから、一個の球体だけが消えてしまっていると考えるのは、どうみても無理があります。

前出の深沢氏は、フィルムに写った円盤の見え方について、「本体がまるで脈動するように変化している様子がわかります。右側のギアが出入りする様子や、左側のギアが右に動く様子がわかります。特に右側の変形が大きいのは、右側のギアの動作による影響かも知れません」と推察していますが、アダムスキーのＵＦＯ写真の中には、船体の上部のフォースフィールドの影響によって生じた水蒸気の雲（と支持者が推察している）

ものが写っている例（下の画像）もありますので、底面だけにフォースフィールドが強く作用するという推測も根拠が見つかっていません。



ところが、財団のユーチューブ動画で紹介されている「オリジナルのフィルムから作られた写真」を観察していた私は、ある点を見落としていたことに気づきました。それまでは、フィルムの円盤の底面の中央にある小さな突起（左写真の矢印）は、それ以前に撮影されていた円盤写真の底面中央部分（右写真の矢印）だと思っていたのです

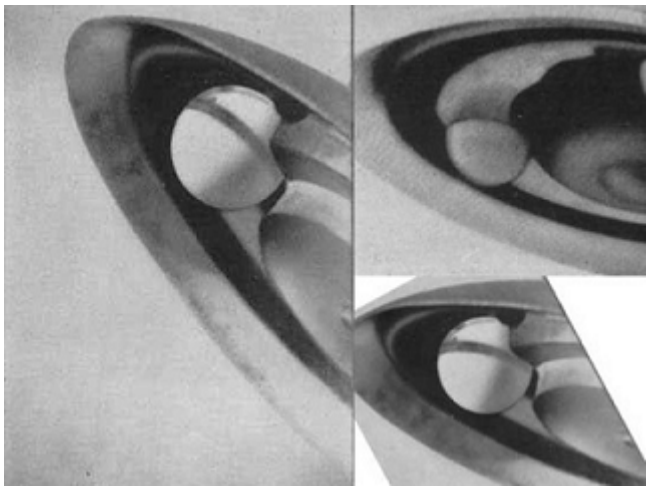


しかし、より鮮明に映し出された静止画像を見ると、フィルムに写っていた突起部分は、底部の〝中央でなく端っこにある〟ということに気づいたのです。

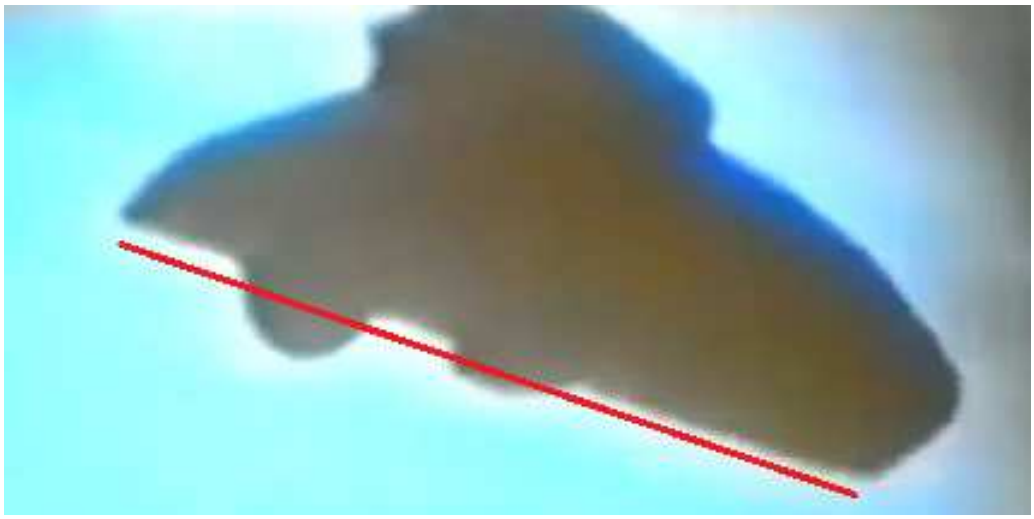
これはどういうことかといえば、この突起は、３つ目の丸い着陸ギアの残存部分だったと思われるのです。模型を切断する際に、位置の関係で３つ目のギアは大部分がカットされ、根っこの部分だけが、あたかも伐採後の木の切り株のように残ったのでしょう。その証拠に、過去の円盤写真に見られるような、中央部分の膨らみは全く見られません。

さらにこの写真では、２つのギアの影が底面に写っているのが、よりはっきりと分かり、つまりこの円盤の底面は平らな形をしていたことを明瞭に示しています。

同じアダムスキー型ＵＦＯでも、１９５２年の円盤の底面構造（下の写真）とは大きく異なっているだけでなく、金属製のランタンとは異なった、切断しやすい材質で作られた模型である可能性をさらに大きく裏付けてもいるのです。



また実際に、以下のコマなどを見ると、赤線で示したように、船体の底面のラインがきれいな直線となっているのが分かります。もし右の磁場による影響ならば、右下の船体の角の付近が、もう少し丸みを帯びていたり、歪んでいてもよいのではないでしょうか。前述しましたように、底面が直線に近くなっているのは、透明な板に貼り付けた証拠ともいえるでしょう。



そしてさらなる疑問は、円盤が登場するシーンです。次の比較画像をご覧ください。左側に写っているのは同じ木の枝です。最初に宇宙船が上空に小さく（逆光のために黒いシルエットで）小さく出現しますが、それがだんだん接近してくる（大きく見えてくる）様子はなぜか写されておらず、急接近した場面にすぐ切り替わります。

これは、懐疑的な見方をすれば、模型を使った場合、徐々に大きさが変わるように撮影することはまず不可能であるので、小さい模型と大きな模型の２種類を作成して、別々に撮影したともいえます。ちなみに、小さく見える場面も、大きく写った場面も、円盤の動きは似通っています。それは見方によれば、アクリル板に貼った模型を手で動かした場合でも可能な動きともいえます。

接近してくる場面が写ってさえいれば、映像の信ぴょう性は飛躍的に高まるはずですので、この部分が欠落していることは、ある意味で非常に大きなマイナスとなっているといえます。疑った見方をすれば、この点を釈明するために、「現像の段階でコマが抜かれて、差し替えられていた」という言い訳をあらかじめ用意していたのではないかとすらいえます。

ちなみに、高梨氏はアダムスキーがフィルムを撮影した当時にアクリル板があったかどうか定かではなかったようで、「ガラス板を使ったのでしょう」と１９９３年のテレビ番組で述べていましたが、１９６５年当時はアクリル板は存在しましたので、もし貼り付けによるトリックであった場合、軽くて持ちやすいけれども価格が高めのアクリル板と、安いけれども重たくて動かしにくいガラス板のどちらを選んだかは不明です。

このようなロドファーフィルムへのさまざまな疑問を念頭において、私はフィルムをコマ送りしながらさらに観察してみました。すると、少し不自然なことに気づいたのです。フレーム内をフラフラと円盤が動いている間は、カメラはほぼ固定されていたのですが、特に上下方向に大きめに動いて、フレームから出そうになった際には、背景もそれに合わせて動いていました。考えてみれば、普通は円盤の動きは予測できないはずですから、

円盤が移動するタイミングよりも、ワンテンポほど遅れてカメラが追う、つまり背景も動くはずです。しかし、先のユーチューブ動画の収録された範囲のフィルムを見た限りでは、円盤の動きとほぼ同時に背景の木々も動いています。あたかも、次に円盤が移動する方向を撮影者が事前に知っているかのようにすら見えました。

私自身がビデオカメラで動く被写体をテスト撮影していた際に痛感したことですが、急に方向を変えてフレームから出そうになる場合は、単にワンテンポ遅れるだけではなく、急に筋肉に力を入れてカメラの向きを変えるために、動かす瞬間に画面が上下に振動してしまい、映像が見づらくなってしまいます。

これは、ユーチューブなどに投稿されているＵＦＯ映像などが、画面が縦に振動して非常に見づらい動画が多いことからも分かります。現在は手振れ抑制機能が付いているカメラが多いはずですが、それでも素人が手持ちのビデオカメラで撮影した動画はブレがあって、安定しないものばかりです。

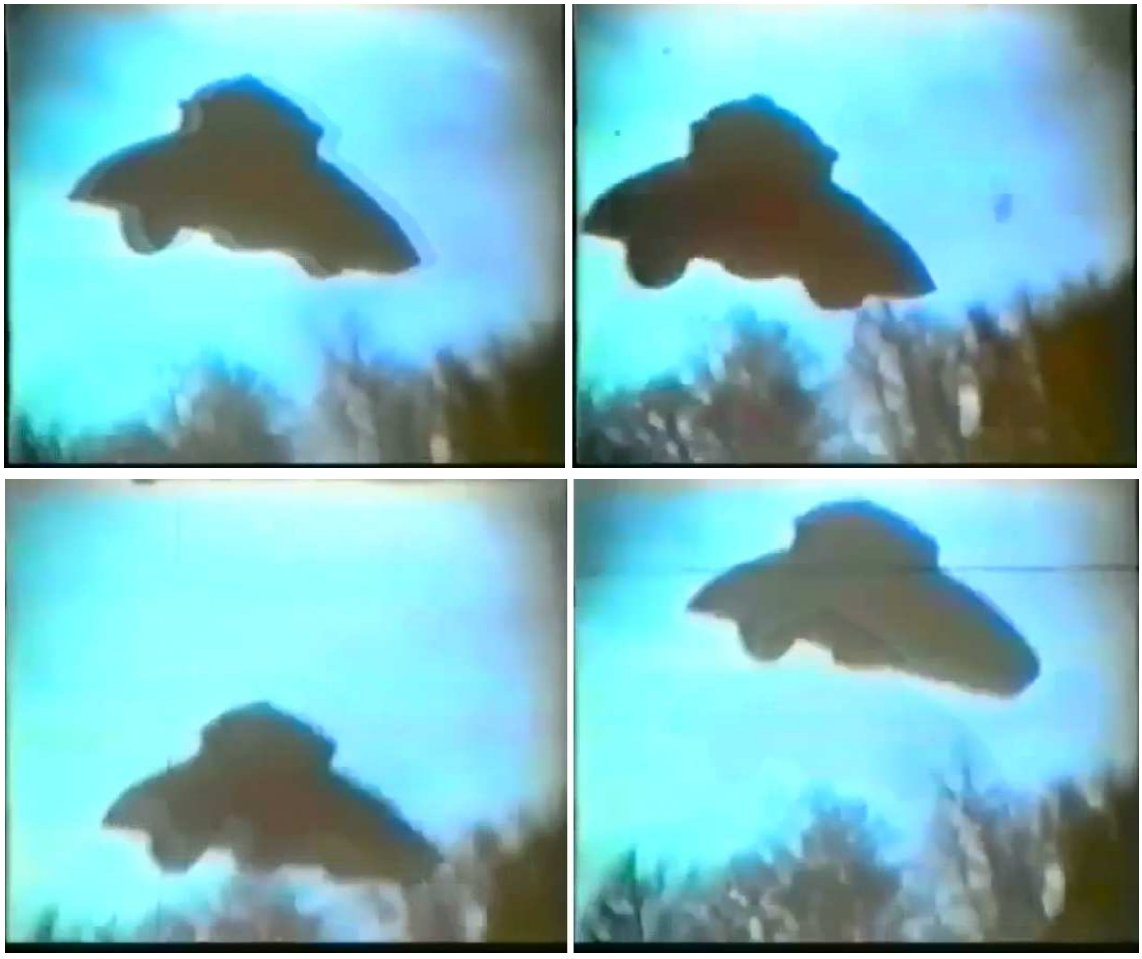
これらのことは、ロドファーフィルムの場合、動き回る円盤を追っていたのではなく、カメラが動いていた可能性を示唆します。以下の連続コマにおける木々の写り方を見ると、カメラの向きを上に移動させて、あたかも円盤が下降したかのように見せた可能性もあります。

しかし、模型のトリックで円盤の変形を写すには、撮影角度を大きく変えないといけません。ただそうすると、背後の風景も大きく動いてしまい、フレームの外に出てしまいますので、撮影の際は、アクリル板を上下に動かすか、前後に傾けなければ、船体の変形と背景を同時に見せることはできないでしょう。上の連続写真をみると、船体がやや後方に傾いているのが分かります。また、アクリル板を後ろに傾けて円盤の底面が見え

るようにし、右のフランジが見た目上は変形したように見せる際に、カメラの角度も同時に変えれば、船体の上昇や下降の調整や、背景の固定などが演出できるでしょう。

実際にフィルムをよく観察すると、円盤の上昇時に船体右下に変形が見られるシーンが大半であるものの、下降時も変形したままの場面もあり、アクリル板とカメラアングルの相乗作用を解析するのは非常に困難です。

トリック撮影の場合は、模型を貼り付けたアクリル板を持つ人（たち）と撮影者という複数の人間が手を動かしますので、誰がどれだけの角度と幅とスピードで手を動かしていたかによって、船体の背景の見え方には、数えきれないほど違うパターンが出じます。フィルムの円盤は、特に規則性を持って動いているようには見えませんので、トリックの張本人たちですら、同じ動きを再現するのは簡単ではないでしょう。第三者が再現ビデオを作る際はなおさらのことです。



海外のユーチューブ動画の中で、ロドファーフィルムのトリックを暴くと称して、遠くに見える円盤のシーンを動画で再現しているものがありますが、そこでは小さな円盤型のシールのようなものを窓ガラスに貼り付けて、カメラだけをジグザグに動かして、あたかもＵＦＯが木立に囲まれた空中をユラユラと飛んでいるかのように見せています。

https://www.youtube.com/watch?v=1M_ADHmPl7s

下の画像の左はロドファーフィルムから、右は再現を試みた映像からの画像です。

以下のように小さなシールを窓ガラスに貼り付け、カメラだけ動かして撮影しています

しかし、仮にこのような方法で、遠くに見えるようなトリックで円盤を撮影することができたとしても、先に示したように、至近距離の円盤は、立体的なものですので、シルエットだけの平面的な紙（シール）を貼ったものではありません。そのあたりをあえて無視して、大きな円盤写真の動画を再現しようとしていないのは、トリックを暴露する検証としては、非常に不完全な、手抜きのものであると言わざるを得ません。

ロドファーフィルムに写った遠景の物体も、立体的なものかどうかまでは判定できませんが、形状が微妙に変わっていくのが確認できます。しかしこれも、手で傾きを変えられるアクリル板などに貼り付けた場合は、傾きによって形状の変化も演出可能ですし、フィルムを見た限りでは、ブレによって変形して見えるようなコマもありました。

アクリル板やガラス板に〝貼り付けた〟という場合、切断面に接着剤等をつけて貼ったことを意味しますが、場合によっては別の取り付け方法も可能かもしれません。とくにアクリル板の場合はガラスよりも穴を空けるのが容易ですので、釘で木製模型を打ちつけた可能性もあるかと思います。ただしその場合は、きちんと固定させないとグラグラと不安定になる恐れがありますので、ネジで留める必要があったかもしれません。
いずれにしても、模型が軽いものであるなら、決して難しい作業ではないでしょうが、少なくとも、窓に貼り付けたトリックではないことだけは確かだと思います。

ちなみに、撮影現場となったロドファー夫人の裏庭から見える自宅は、格子窓となっていて、そこに模型を貼り付けて撮影するのは無理です（もちろん、その後に窓を入れ替えてなければの話ですが)。

以下の画像は、ビデオカメラを持って、当日のアダムスキーの撮影の様子を現場で再現してみせているロドファー夫人の様子です。

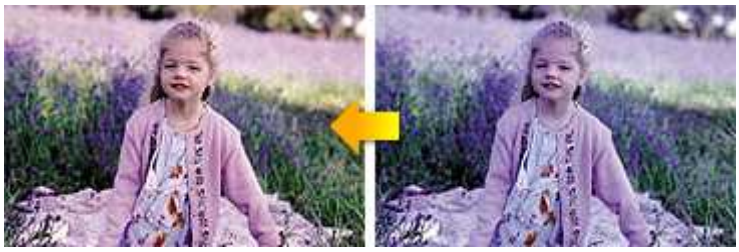
ところで、ロドファー夫人はインタビュー映像やその他の取材において、「私が目にした宇宙船の色合いは紫に近い青色、ロイヤルブルーをしていた」と証言しています。昔、日本のＵＦＯ特番でロドファーフィルムを観た視聴者も、船体は濃い青色をしていたことを記憶していますので、それは確かなことなのでしょう。

ここでひとつ気になることがあります。８ミリフィルムには、太陽光のもとで撮影するデイライトフィルムと、室内用のタングステンフィルムがありますが、もし後者で屋外撮影をすると、補正フィルターを付けていない限り、以下のように、紫がかった青色になってしまいます。

上記の可能性は前述の深沢氏も述べていましたが、現在見られる低画質のロドファーフィルムの映像は、どれも青みがかって見えます。けれども８ミリ映像よりも鮮明なスチール写真（静止画）が存在し、これには青みは見られません。

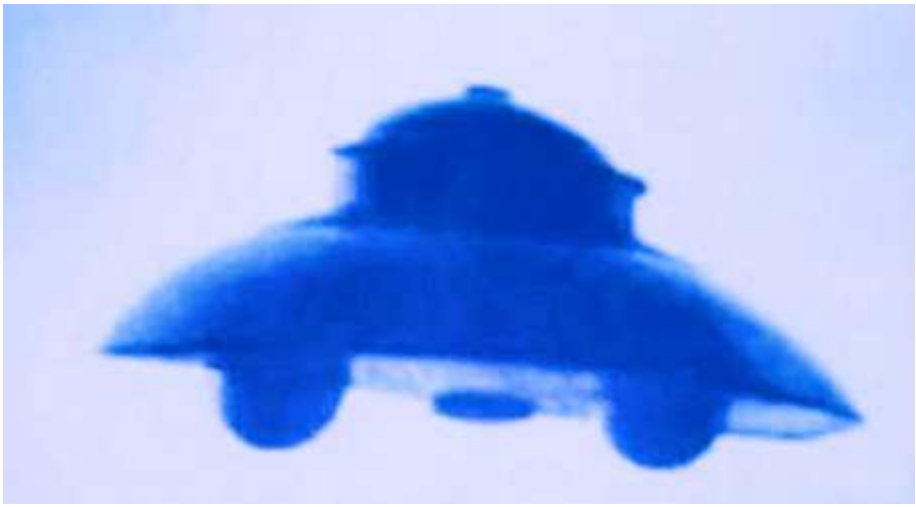
下の写真の左がスチール、右がフィルムです。この色あいの違いは、８ミリフィルムをスクリーンに写してスチール画を撮影する際に、色温度を補正するフィルターをつけた可能性もあるかと思います。

下の写真は現代版のソフトを使った色温度補正の例です。



もしロドファー夫人が室内撮影用のタングステンフィルムだけ購入し、初めて昼間に撮影したものがロイヤルブルーに写ってしまい、その理由が分からずに、映像の仕上がりに合わせた証言をしていたとしたら、彼女は肉眼では濃い青色の船体を見ていないことになります。夫人は、買って間もないビデオカメラの扱い方をよく知らなかったため、アダムスキーが代わりに撮影したといいます。

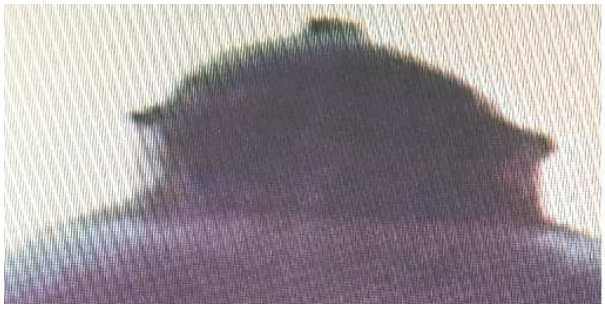
アダムスキー財団のグレン・ステックリング氏によれば、フィルムは何度もコピーを繰り返されてきたので、画質が劣化したものしか現存していないといいますので、もしかしたら、元々のフィルムの円盤は以下の画像のように写っていたのでしょうか（これは色を調整したものです）

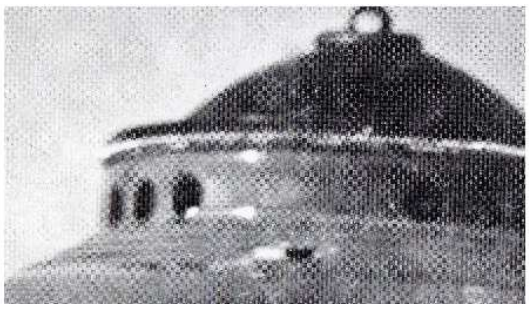


もうひとつの可能性として、船体が歪んで見えるほどフォースフィールドに包まれているＵＦＯが、紫がかった青色に見えることがあるのでしょうか。フォースフィールドの正体が分かっていない段階では、それについて明瞭な答えは誰も持たないでしょう。少なくとも、アダムスキーが撮影した他の円盤写真の中に、ロイヤルブルーの船体の偵察船は見当たりません。

ロドファーフィルムにおける、船体の変形の原因という微妙な問題とは別に、確たる証拠（ハードエビデンス）にもとづいた疑問点の多くは残ったままです。前述しましたように、着陸ギアが２個しかないこと、ギアが反射する底面が平らであること、日光の角度と一致する閃光があること、接近して大きさを増してくる場面が欠落していること、半分に切って貼り付けたような底面のラインが見えること、そして、さらに細かいことをいえば、過去の円盤写真に見られる天頂部のリング（あるいは球体）がないことです。

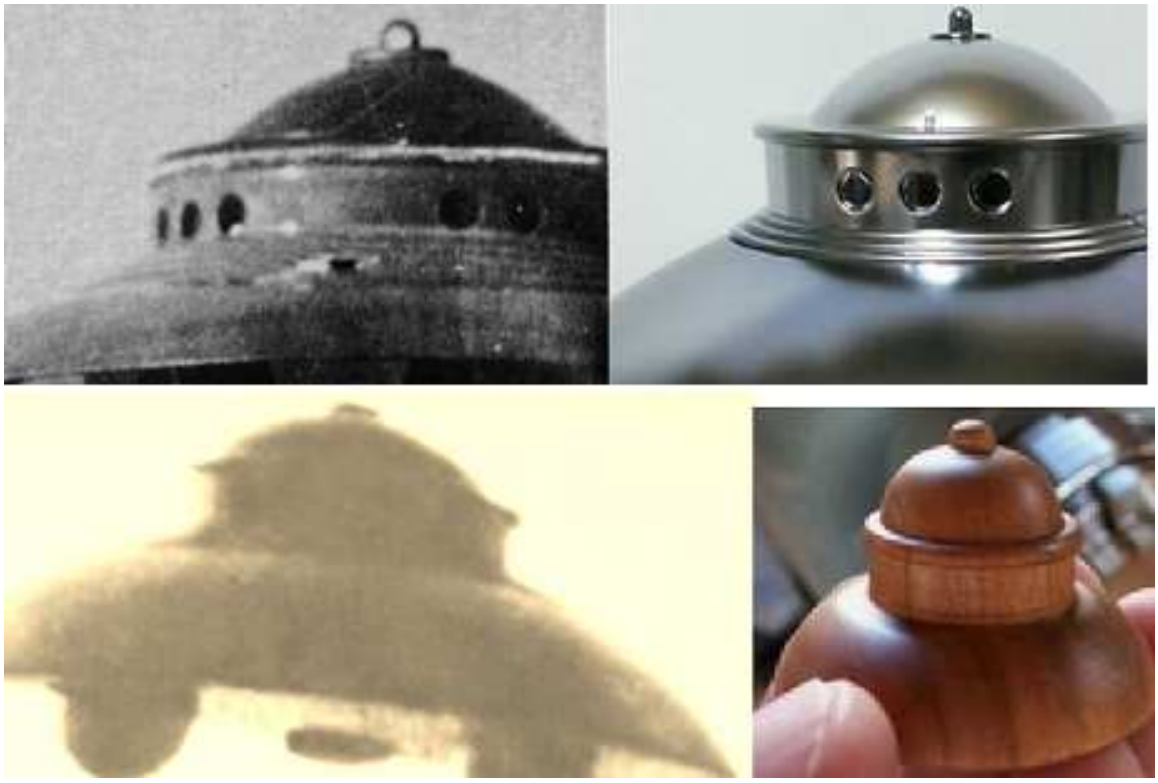
以下の比較写真をご覧ください。左側がフィルム、右が１９５２年の写真です。





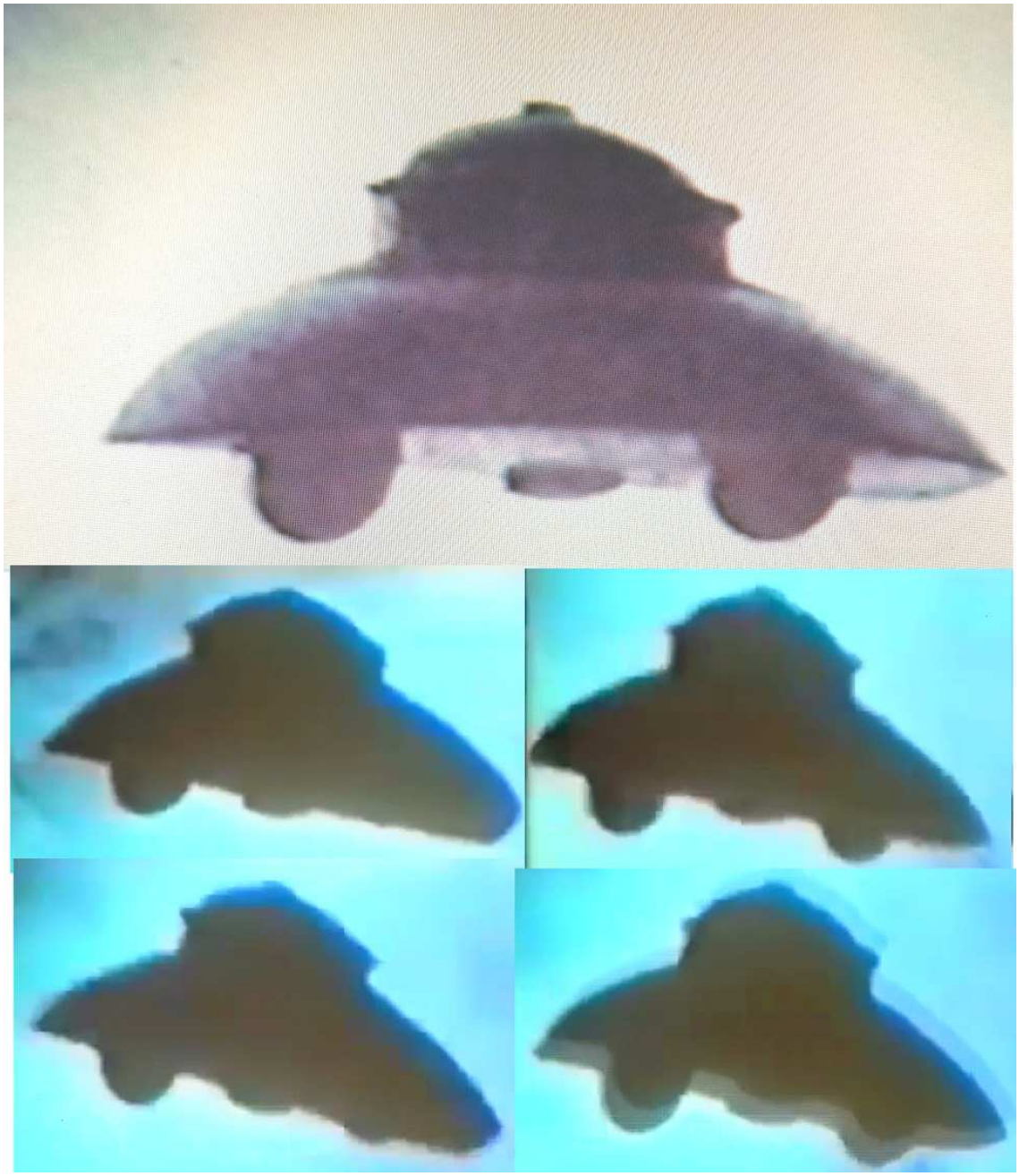
天頂部のリング（あるいは球体）は、フィルムのどのコマにも写っておらず、フォースフィールドの影響で消えたように見えるにしては、台座のような部分の輪郭が直線的すぎますので、最初から存在しなかったといえるでしょう。その理由を模型説の立場から推察すると、半分に切った円盤模型を作る場合、金属製のランタン（上部にリングのあるもの）は利用できなかったともいえます。

私が１９５２年のアダムスキーの接近ＵＦＯ写真を最初に見たときの印象は、進化した惑星の円盤にしてはブリキみたいな質感だなと感じました。ロドファーフィルムに対しては、どこか木工細工のような印象を持ちました。金属と木では、後者の方が反射が穏やかな感じがします。以下の右側のミニチュアと比較してみてください。



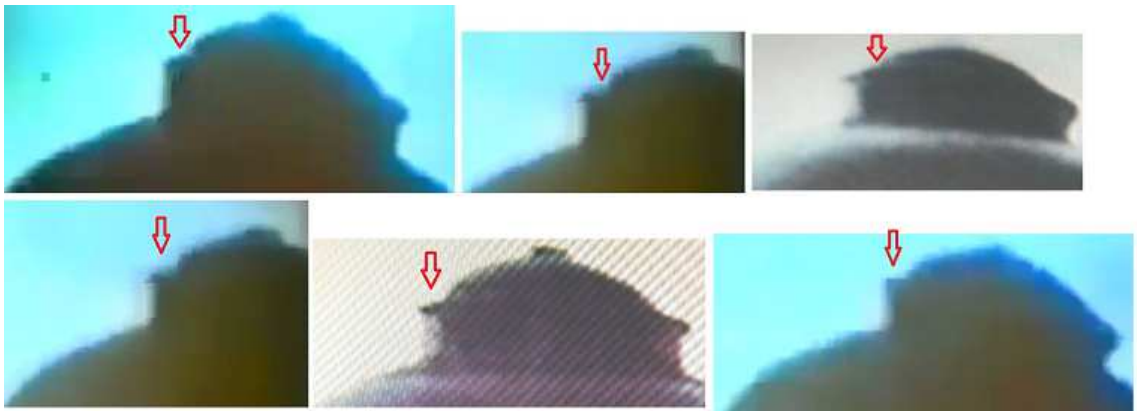
船体の構造について注意を払いながら、さらにフィルムを観察していると、もうひとつの不可解な点に気づきました。それは頂部のドーム型の部分です。それは、寺院等の建物の上部にも見られる形状です。

しかし、ロドファーフィルムのどのコマを見ても、ドームの形が片方（左側）に寄っていて、そのゆがみ方が同じなのです。以下の比較写真をご覧ください。



これがもし船体の磁場の影響だとすれば、なぜ右下のフランジ部分のようにドーム部分も変形し続けないのでしょうか？

さらによく見ると、ドームの縁の輪郭（下の図の赤い矢印）の形は、どの場面も全く変わっていません。



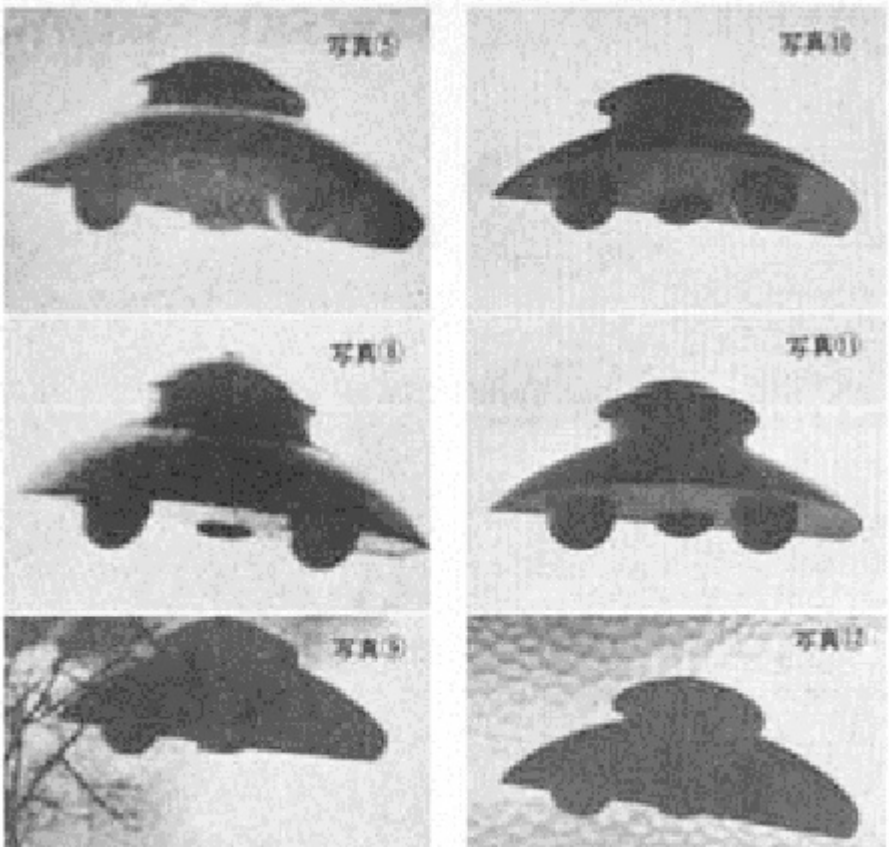
なぜ船体の右下部分だけが大きく変形を続けているのに、他の部分はほとんど同じ形状を維持しているのか、船体を包んでいるはずの磁場の影響では、ありえないことだと思われました。

ここまで考えたとき、私はハッと気づきました。

模型を〝半分に〟切っていたと考えていたのが間違いだったのではないかと。

高梨氏の模型写真がいつ作った物かは分かりませんが、１９９３年のテレビ出演で披露した模型については、半分に切ったとおっしゃっていました。もういちど、高梨氏のモデルと比較してみると、ドームのゆがみがほとんどないように見えます。

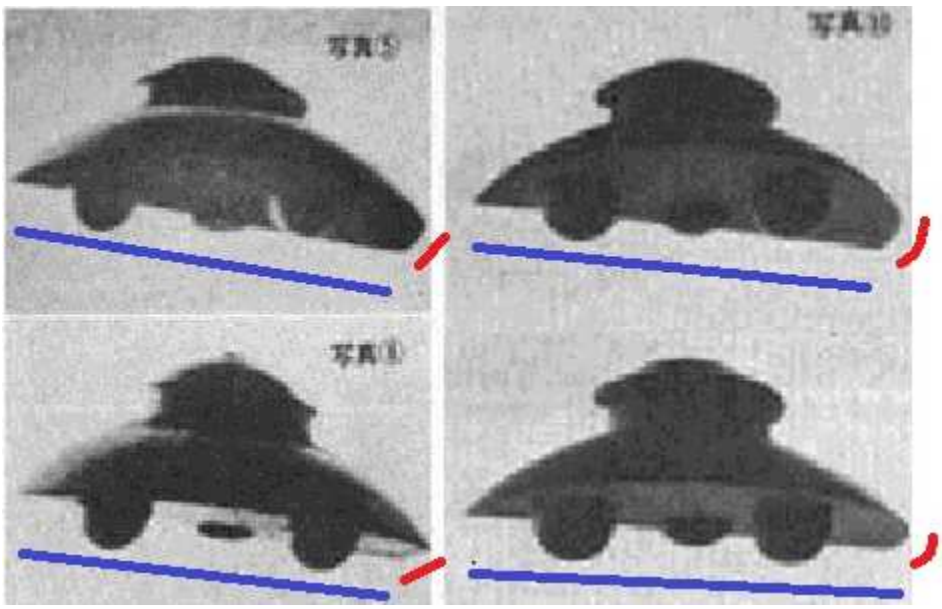
下の比較写真の左側のアダムスキーのフィルムでは、ドーム部分が左寄りにふくらんでいます。



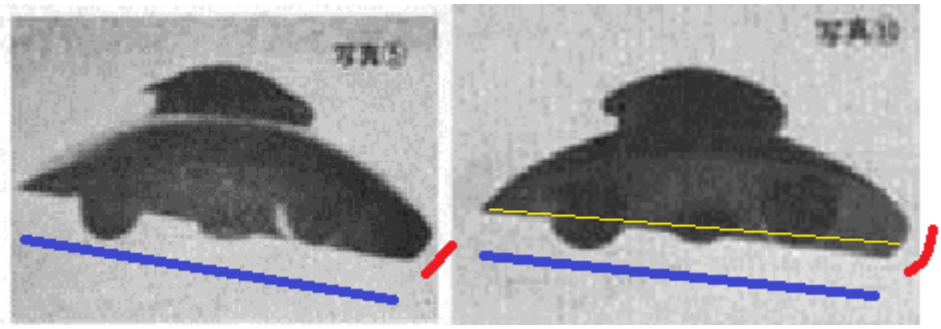
正確に半分にせず、円の中心から少しずらして模型を切った場合、切断面は以下のようになるでしょう。右図が中心線での切断面、左図が少しずらした切断面。手描きのために少し歪んでいますが、その下の写真の黄色い線と細い白線で囲んだ山の形が切断面を示しています。

これをロドファーフィルムの円盤にあてはめれば、ドーム部分は常にゆがんで見え、右下のフランジ部分は、船体を後方に傾けると変形して見えるはずです。つまり、切断前の船体の中心線により近いほうの上部がふくらんで見え、その下部は鋭角に見えます。それは、下の写真のように、ドーム部分の左側がふくらみ、左下のフランジの縁は鋭角に、右下の縁が鈍角に変形して（角ばって）見えていることと一致しています。

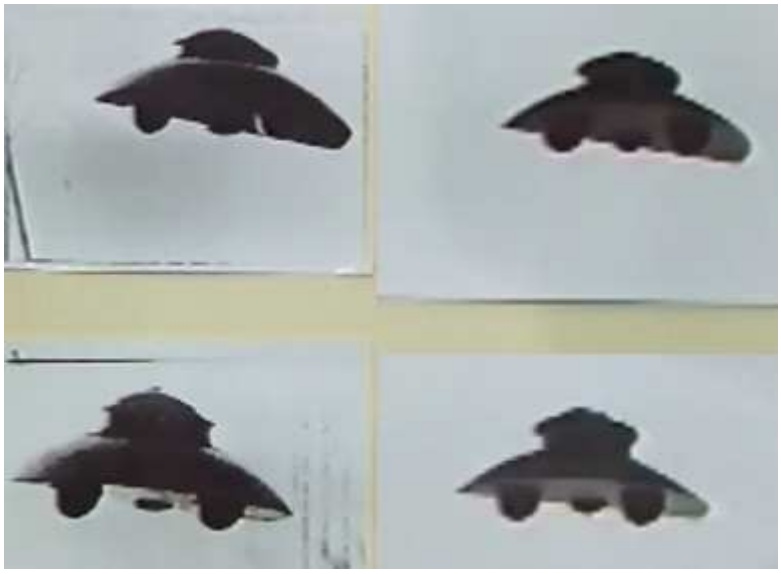
上記のことは、高梨氏の模型との比較写真を見ても分かります。
ロドファーフィルムの円盤（左側）と大きさを整えるために高梨氏の模型（右側）を少し拡大して並べて下のように比較すると、模型を二等分した高梨氏のモデルのほうが底面の面積が広いので、右下の縁の輪郭（赤線）がより丸みを帯び、貼り付けた際の傾斜の角度（青線）も左側よりも緩やかになっています。



もし高梨氏の模型を左側の円盤の形状に合わせて修正する際には、下の右写真の細い黄色の線に沿って切ればいいのです。そうすると右縁は円弧の長さが減る分だけ、より直線的になり、貼り付けた際の船体の傾きも大きくなり、左の写真とかなり一致してきます。
もちろん、丸い着陸ギアの位置も修正する必要があるでしょう。



下の写真はテレビ番組で高梨氏が示したフィルム（左）と模型（右）の比較



高梨氏の模型は、確かに偶然では片付けられないほど酷似していますが、私は子供の頃からこの比較画像を見て、「やっぱり違うなあ」と感じてしまっていた理由が、やっとわかりました。高梨氏のモデルは模型は二等分していたので、やや斜めに切断した（と思われる）アダムスキーの円盤（模型）全体から感じられる歪みが少しマイルドになっていたのです。微妙な差ではありますが、もし商品をやや斜めに切断する作業を日頃から行っている職人などが見れば、きっちり二等分された商品は、何か違和感を覚えてしまうことでしょう。言い訳がましくなりますが、私にとって、二等分と斜め切りの違いは、受ける印象として大きな差となっていたのです。

テレビ特番での高梨氏は、カメラから見た模型の左側をやや手前に出して、船体を後方に傾けることによって、ロドファーフィルムと同じ形状に見えるようにしています。

この〝左側をやや手前に出す〟行為がなぜ必要だったかと考えると、アダムスキーのフィルムが模型だった場合、切断面が真ん中（等分）ではなく、少しずれていたために、同じように見せるには、その傾きの分だけ模型を手前に出す必要があったと思われます。つまり、高梨氏は切断ラインは正確には再現できていなかった証拠といえるでしょう。

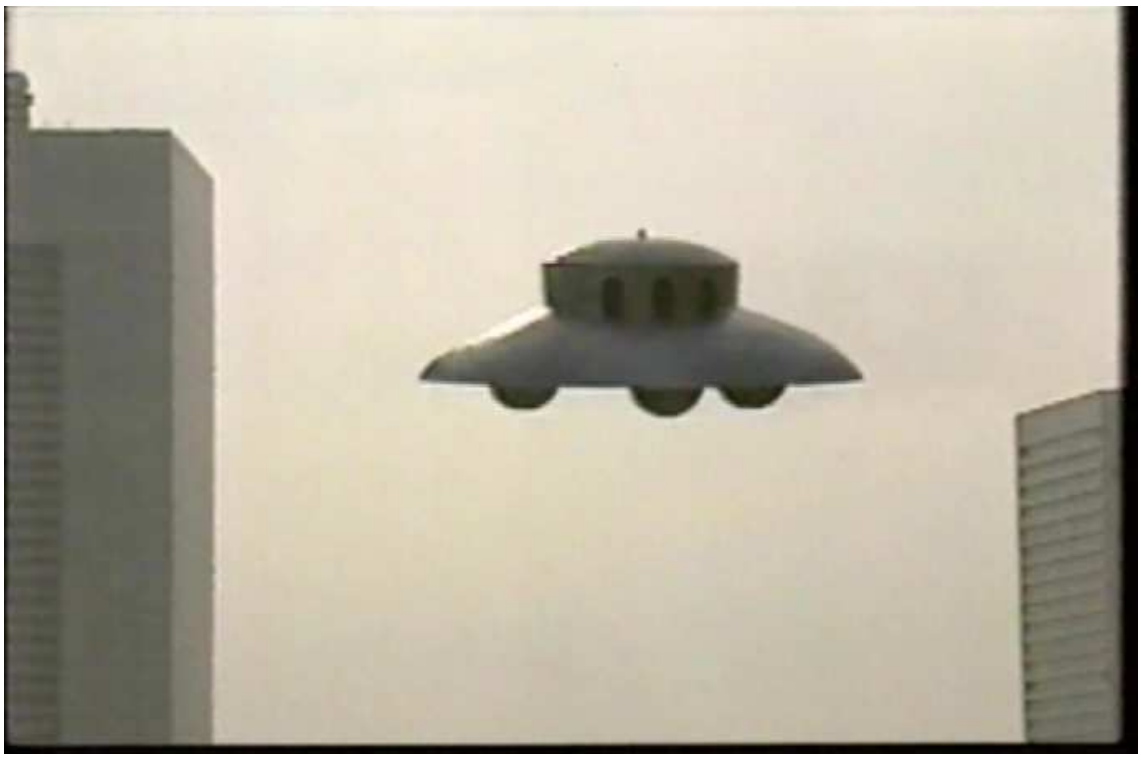
フォースフィールによる影響と支持者が唱えるロドファーフィルムの円盤のゆがみが、切断した模型の見え方とここまで偶然に一致することがありえるのでしょうか。

試しに、私の自宅の（汚い）ナベのふたを、中心からずらして切断したと仮定して下部をトリミングした画像（左）を、以下のようにフィルム画像と比較してみました。

こんな安易な比較をしただけでも、円盤の右下部分の不思議な変形と、ナベの右下の見た目上の形状が似通っていることが分かりました。１９９３年の番組で高梨氏に反論していた韮澤氏が、フィルムの円盤と高梨氏の模型では左右のサイズの比率が微妙に違うと指摘し、高梨氏は「正確に再現していないから当然のこと」と一笑に付していますが、たしかに誤差があったのは明らかのようです。

このとき私は、高梨氏がなぜ自身で再現ビデオを作らなかったのかが分かった気がしました。船体の磁場で変形したとされるＵＦＯの独特な形が、切断模型の見た目の輪郭と酷似していて、さらに底面の切断面のラインの角度までそっくりだったら、わざわざビデオまで撮影して再現しなくても、トリックは明らかだと高梨氏は思ったはずです。

ところが、テレビ番組では、高梨氏の監修という名目で、テレビ局側がアクリル板に模型を貼って、屋外で再現ビデオを作っていたのです。以下がその画像です。



残念ながら、再現ビデオでは高梨氏の模型が使用されず、半分に切られた円盤模型には着陸ギアが２個ではなく、３個つけられてもしましたので、おそらく高梨氏の監修というのは、スタッフが製作した映像を最後にチェックするだけのものであったのだろうと思われます。最初から高梨氏の模型を使用しなかったのは、それが木製であることや、サイズが小さめであることが原因であったのかもしれません。最後の確認の時点で、模型を作り直してくれとは言えなかったはずです。

さらに残念なことに、スタッフはアクリル板を上下左右に揺らしてくれてはいるものの、後方にのけぞらせてロドファーフィルムにあるシルエットの形状変化がカメラに写るような動かし方をしていませんでした。スタッフ側は撮影角度による見かけ上の形状変化の確認の重要性がわかっていなかったのでしょう。模型を正面向きで後方へ傾けたシーンもありましたが、これでは右縁の大きな形状変化を見せることはできていません。

また、港を背景にすることを念頭に置いていたせいで、日光との位置関係も、実際のアダムスキーのフィルムとは異なったものとなっていました。８ミリ映像ではないとはいえ、せっかく再現ビデオを作る機会をもてたのに、非常に残念に思いました。模型の形状も、アダムスキーのフィルムとはかなり違っており、ちょっと安っぽい玩具のような印象がします。しかし、この再現ビデオには、それなりの成果もありました。それは、特に円盤の左右の背景を広めに映すためには、かなり大きなアクリル板が必要になってくることを明らかにしたことです。つまり、アクリル板を持つ人の手が写らないようにするためです。

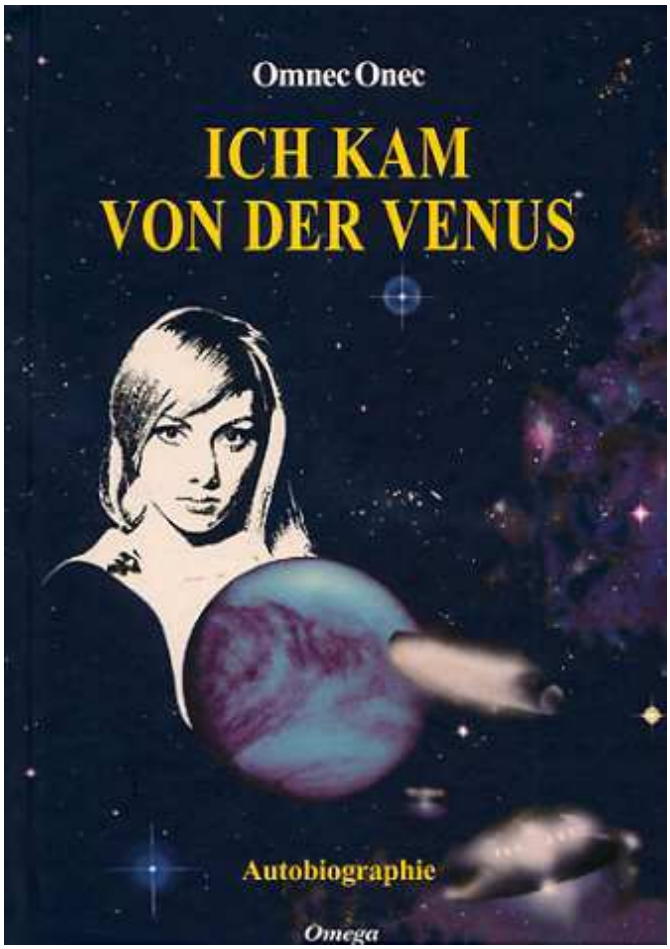
この再現ビデオをロドファーフィルムと並べて比べてみると、フィルムの縦横のサイズの問題ではなく、背景との大きさのバランスからみて、円盤の左右の背景が写る範囲に大きな差があるのがわかります。

当然ながら、円盤とカメラとの距離、あるいは望遠ズームの使用の有無によって、画面に映る円盤のサイズが異なってきますので、必然的に周囲の背景が写る幅も違ってきますが、前述しましたように、アダムスキーのフィルムの場合は、遠くに小さく円盤が見える場面と、上のように至近距離に見える場面しかなく、徐々に接近してくるところや、中間距離のシーンが欠落しているのです。つまり、「模型では撮影が不可能な」場面だけが一切無いのです。

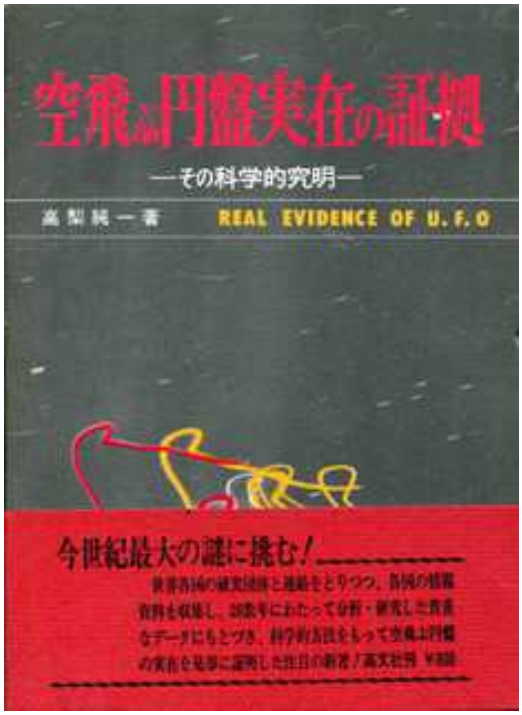
ただ、そもそも、再現ビデオの必要性を訴えているのは、アダムスキーを支持する側が大半です。一般的な視線で考えてみれば、ランタンを用いたと思われるアダムスキーの円盤写真につづいて、半分に切った模型と疑われているロドファーフィルムについての真偽論争において、アダムスキーに思い入れのない人たちは、「どうみても、模型をガラスなどに貼って撮影したとしか思えない」という結論をすぐに下すことでしょう。

しかし、子供の頃からアダムスキーを信じて育ってきた、その道何十年の支持者の方々にとっては、アダムスキーの最初と最後のＵＦＯ映像がニセモノであったことに同意するのは、自分のこれまでの人生を否定されるかのような大問題である場合もあるでしょう。ですから、どんなに詭弁といわれようと、少しの違いを見出して、ランタン説や貼り付け模型説を強く否定し、「トリックだというなら、動画を再現してみなさい」と訴えることもあるでしょう。

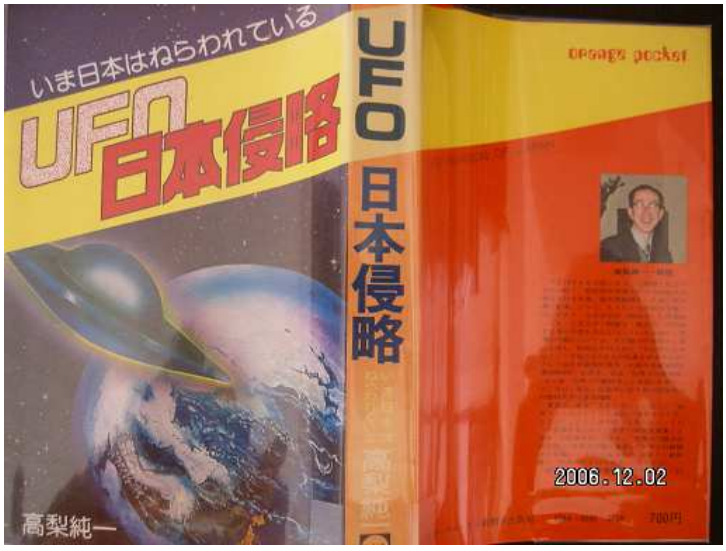
オムネク・オネクの異次元世界の説明も、アダムスキーが「人間は一瞬で生まれ変わるので、霊界は存在しない」と教えていたことを根底から覆すものですので、古くからのアダムスキー信奉者には、絶対に受け入れられない考え方で、実際に現在でも激しい抵抗を示している人もいるそうです。彼らには時間が必要だと私は思いますが、同時に、歳を重ねて考え方が固まってしまった人に、柔軟性を求めるのは、なかなか難しいことであろうとも思います。



しかしながら、模型説を唱えた高梨氏は、決してＵＦＯ否定派ではなく、肯定派に属する人物で、昭和３１年（１９５６年）に、近代宇宙旅行協会（のちのＵＦＯ科学協会）の創設者です。氏はＵＦＯを科学的に解明しようとしていた真面目な研究者として知られていたようで、『空飛ぶ円盤実在の証拠』という本も刊行なさっています。ある意味では正統派ＵＦＯ研究者そのものともいえ、実際に「日本ＵＦＯ研究の正灯」と呼ばれていたといいます。



そうはいいつつ、なんじゃこりゃというタイトルの本も出されてはいますが、本のタイトルは出版社が決める権利を持っていますので、私も自分の本意ではないタイトルを付けられた苦い思い出があります。



高梨氏は１９９７年に逝去されていますが、残念ながら、私は生前の高梨氏にお目にかかったこともお話を伺ったこともありません。第三者の方々による解説等を拝見した限りでは、高梨氏は、いわゆる新興宗教的なアダムスキー信者（コンタクティ信者）たち

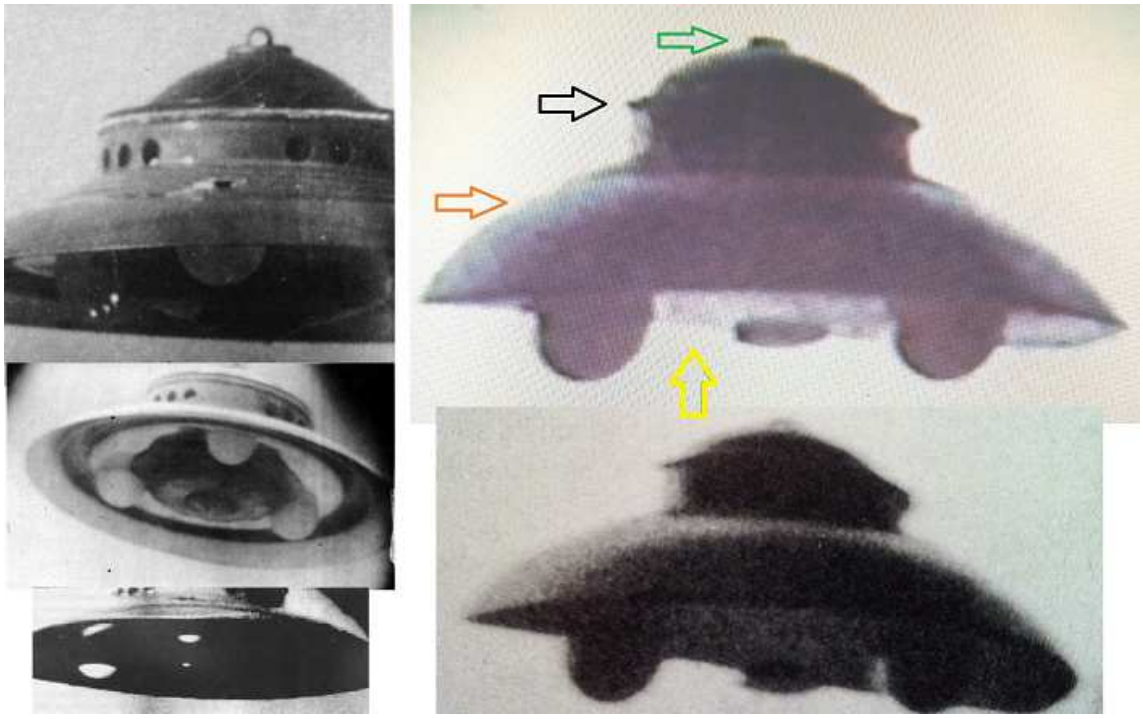
とは対立する立場で、客観的な証拠を重視していたようで、その一貫した姿勢に対しては、アダムスキー派の人たちの中ですら尊敬の念を抱く人たちがいたようです。僭越ですが、ある意味では、高梨氏の姿勢は私の検証姿勢にも通じる部分があるように思いました。

「では、益子さんがロドファーフィルムをトリックで再現してみればいいのでは？」といわれるかもしれません。ただ、それには当時と同じ８ミリ映写機とフィルムを用いて、同じような場所で撮影しないと、不完全なものとなってしまうでしょう。デジタルカメラで仮に再現できたとしても、加工が疑われることになります。しかしそれ以前に、私にそこまでの熱意がありません。私の中では結論がほぼ出てしまっているからです。これまで、誰もフィルムの再現をしてこなかったのは、検証の度合いは違っても、先にも述べましたように、そこまでやろうと思う人もいなかったからではないでしょうか。

１９５２年のアダムスキーのＵＦＯ写真が、１９３０年代からあるランタンを用いたものであるという証拠写真が示されるまで、実に６０年もの歳月が流れています。確かに、ランタンのハンドルを外さない限り、穴には気づかないものですが、まともに信じる人たちが少なかったせいもあるでしょう。わざわざ時間と労力を費やして確認しようとすること自体が笑われてしまうからです。それと同時に、アダムスキー支持者たちが、冷静な視点で懐疑的に検証することもほとんどなかったからでしょう。そういう意味では、現在のスピリチュアル系の人たちと同様と言えるかもしれません。

ご参考までに、１９６５年に撮影されたロドファーフィルムに映ったアダムスキー型ＵＦＯと、１９５２年に撮影されたものの形状の違いをまとめてみます。双方の映像の撮影時期には、１３年の差がありますが、その間に円盤の形状が変化したり、あるいは最初から別の種類の宇宙船があったという推察も可能でしょう。ただ、それを考慮しても、

片方がランタンに酷似し、もう一方が切断加工が容易な素材に見えてしまうという疑問点は残ります。下の写真は、左側が１９５２年の画像、右側が１９６５年のロドファーフィルムの円盤です。磁場の影響でここまで変形して見えるとは考えにくいものです。



相違点のまとめ

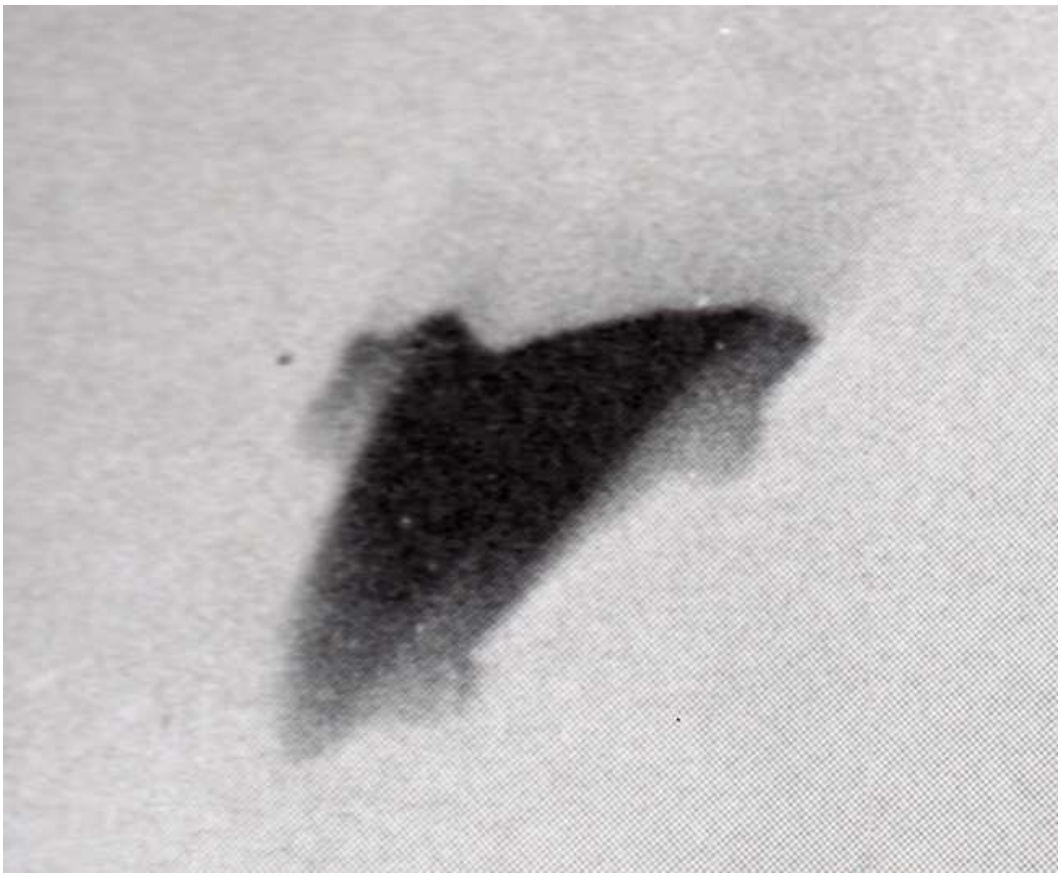
① オレンジの矢印
フランジ（傘の部分）の幅と大きさ、上のキャビン（船室）部分との大きさの比率
（たとえていえば、左側はミニスカート、右側はロングスカートのような感じがします）

② イエローの矢印
底面の構造。右側はギア(球体)が２個しか見えず、底面全体も、やや平面的に見えます

③　グリーンの矢印
天頂部。左側はリングか球のようなものが見えますが、右側には平べったい台座のみがあるように見えます。

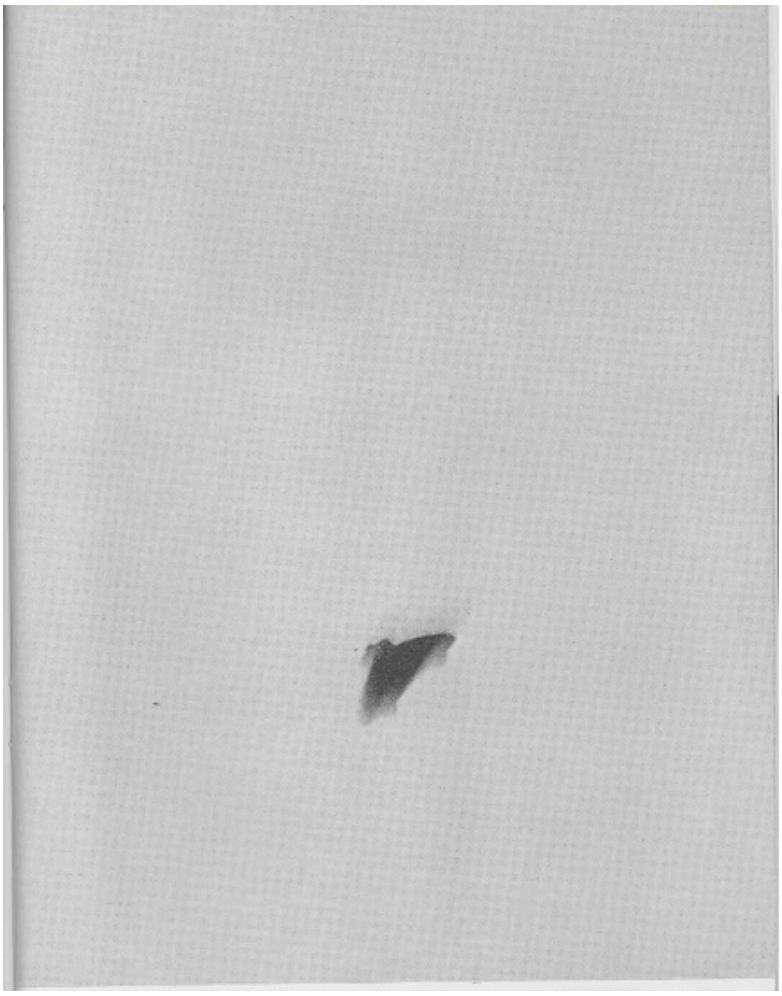
④　ブラックの矢印
ドーム型の底辺部分の縁（帽子のつばのような部分）が右の円盤は少し突き出ています

ところで、ロドファーフィルムのアダムスキー型ＵＦＯの形状は、１９７５年に千葉県の梅原君が撮影したアダムスキー型ＵＦＯ（下の写真）に似ているようにも思われます。



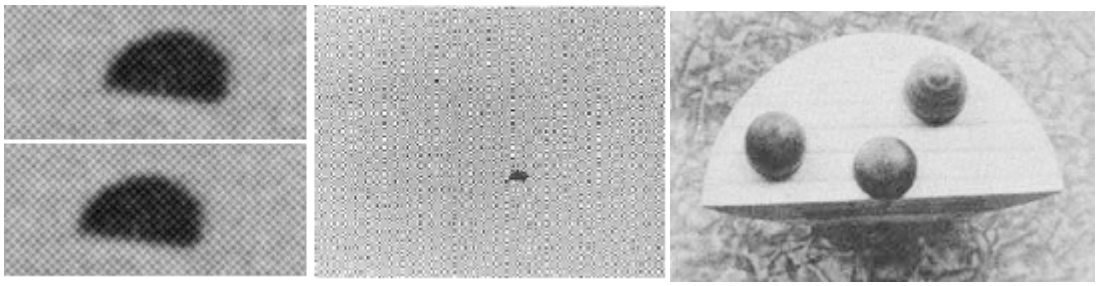
梅原君の写真のＵＦＯは、ロドファーフィルムのものよりも、全体的にスカート部分が大きめ（あるいは上部のキャビン部分が小さめ）ですが、着陸ギアが２個しか見えないこと、そして底面が平らに見え、その輪郭も直線的であることから、高梨氏と同様に、透明な板に模型を張り付けた可能性もあります。

しかし、彼の写真は下のように、ロドファーフィルムよりも左右の背景が広く写っていますので、もし模型だったならば、かなり小さいものであったと考えられます。



1

以下は、左側が梅原君のＵＦＯを連続撮影した中にあった不思議な形状の写真２コマ、中央がその全体図、そして右側が高梨氏の模型モデルの写真です。



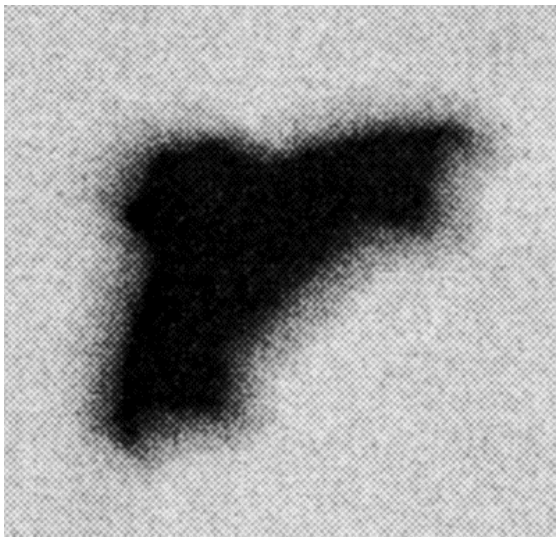
これが何であるかは編集部では（本人も？）よく分からなかったそうですが、これはまさに模型を半分に切ったものを下から見た形をしています。この写真は、間違えて雑誌社に渡してしまったのか、あえてヒントを与えるつもりだったのか、あるいは別の人物が梅原君を（少年なら偽造を疑われないだろうと考えて）利用した際に、誤ってこの写真も混入

させてしまったのか、理由は定かではありません。

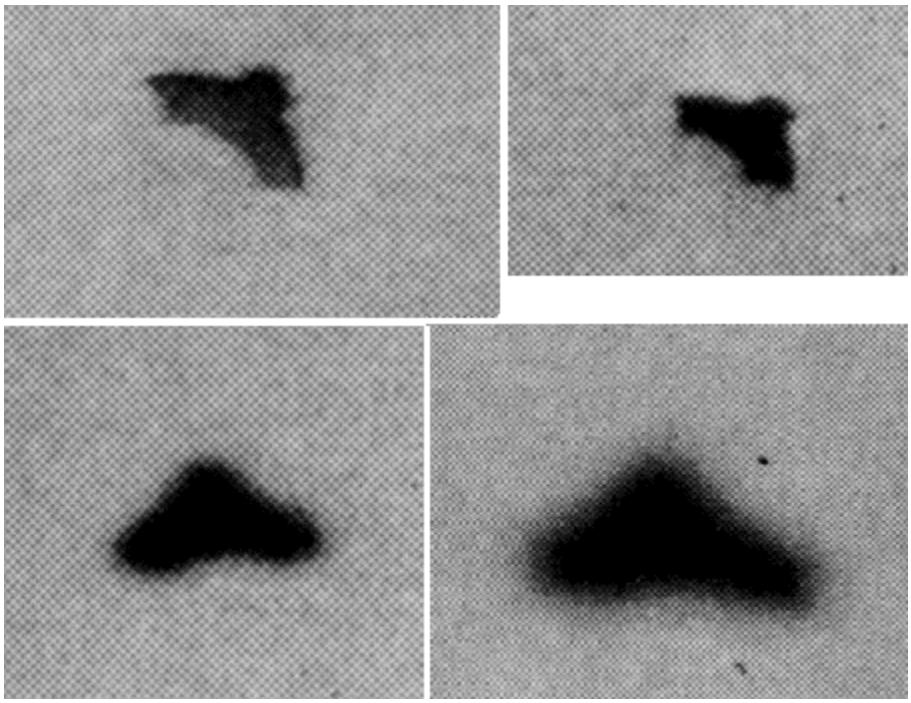
ところで、高梨氏の模型説の発表と、梅原君の写真の撮影のどちらが先だったのかは現時点では確認できていません。高梨氏は自身の機関紙もお持ちですので、専門誌に掲載される以前に発表していたり、集会等で発表してりしていた可能性もありますので、梅原君との時期が近い場合は判定は難しくなります。もし梅原君の発表のほうが明らかに先だったとしたら、たいしたもので、高梨氏が梅原君の写真からヒントを得た可能性は高くなりそうです。

ただ、その場合は、通常なら梅原君の写真にヒントを得たと正直に言うだろうと想われますが、邪推になりますが、高梨氏はかつて、「自分が日本で最初にＵＦＯ研究団体を作った」と主張して、ライバルの荒井氏に批判されていたり、どちらかというと自身が中心となって行動する傾向のせいでメンバーが会を離脱したり等の話もありましたので、梅原君の写真にヒントを得たとは言いたくなかった可能性もないとはいえません。

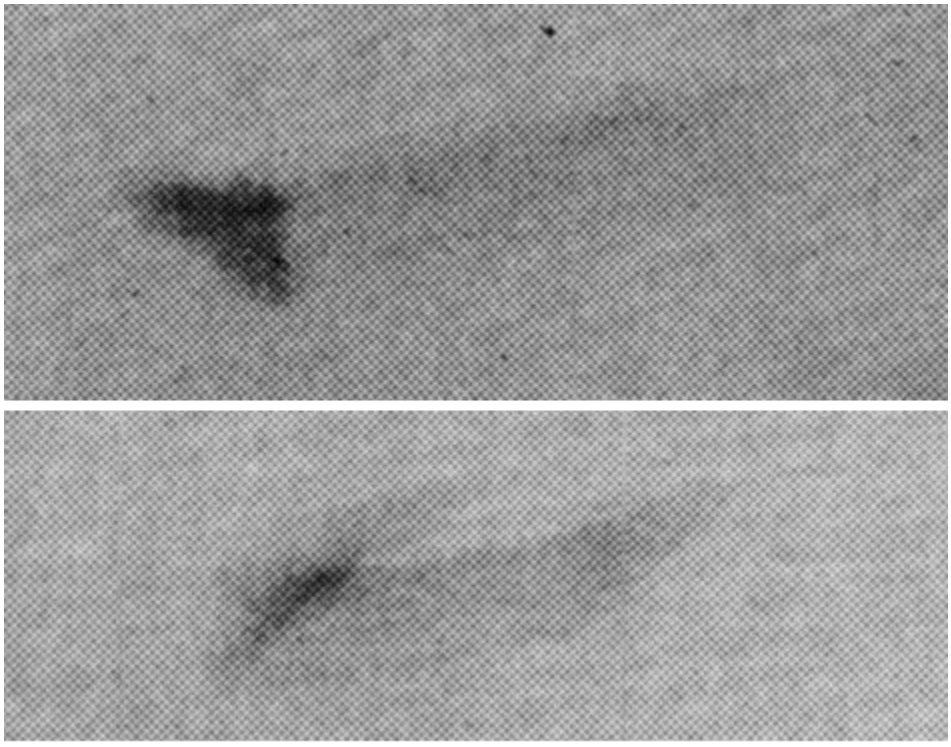
そして、梅原君のＵＦＯ写真の不思議な特徴は、右上に見える「尾を引いたような残像」ですが、これが少し奇妙なのは、船体のシルエットはブレていないことです。しかしこれは、ガラス板かアクリル板に写っていた模型の影が、板を揺らした際に少しブレて写ったものと考えると、光のさす方向と一致していますので、つじつまがあいます。
下の写真の左側はコントラストを強めたもの、右側は当時は「船体をとりまくフォースフィールドが写っているのではないか」とも言われていたもの。どちらも、アクリル板などに写った影が少しブレたようにも見えます。



以下は他のコマからの抜粋



下の画像は、尾ひれが長く写った画像２枚

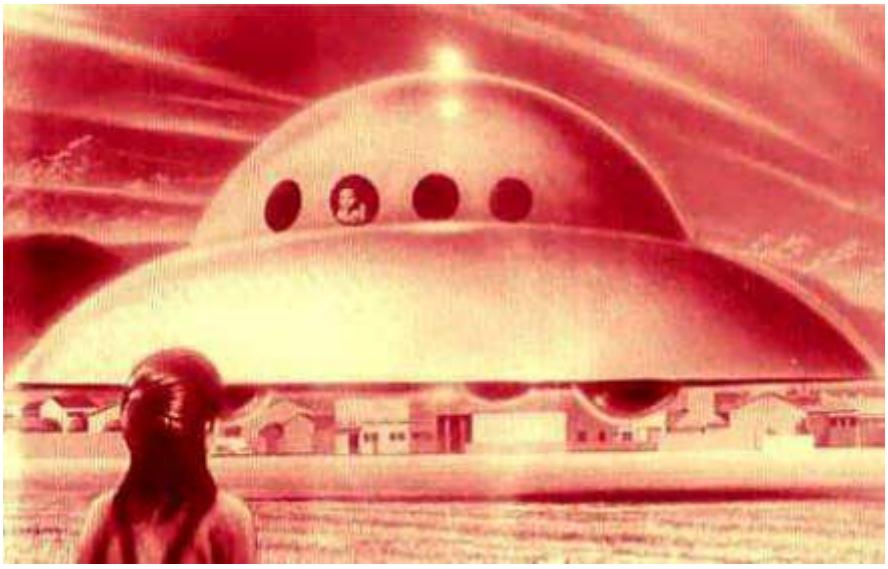


このように、滑らかな面にできた長めの影が見える写真の例としては、氷のリンクの上を滑るスケートなどが挙げられるでしょう。

ちなみに、梅原君の撮影したＵＦＯは、１９６８年に米国ユタ州でフリッツ・ヴァン・ネストが撮影したアダムスキー型円盤（下の写真）にも似ているように見えます。

私自身はまだアダムスキー型円盤というものを目撃した経験はなく、光に包まれている飛行体や、半透明に見えるものしか見たことがありませんので、アダムスキー型ＵＦＯが実際にどのように見えるのか、船体を覆う磁気フィールドによって、どのように歪んで見えるのか、実体験にもとづいたことは何もいえません。

かといって、現時点では、アダムスキー型ＵＦＯを目撃したという他の人たちが、はっきりそれと分かる写真は動画を公開してもいませんので、昔の写真を検証するしかないのが残念です。ある人たちは、「現在はもうアダムスキー型円盤は飛んでいない」といういっぽうで、懐疑的な人たちは、「アダムスキー型ＵＦＯを目撃するのは、アダムスキーブームの時代の年配の人たちだけ」という、心理的な（脳内現象的な）解釈をしたりもしています。



アダムスキー財団のグレン・ステックリング氏は、「そもそもアダムスキー型というのは、異星人たちにとっても古いタイプのレトロな宇宙船で、私たち地球人が遠い昔に見たものを思い出させるために、あえて目撃させたものだと説明しています。そうだとすれば、ブリキのランタンに似ている印象がするのもうなずけるのですが、これもアダムスキー本人はそのようなことは何も述べていませんので、信ぴょう性は不明です。

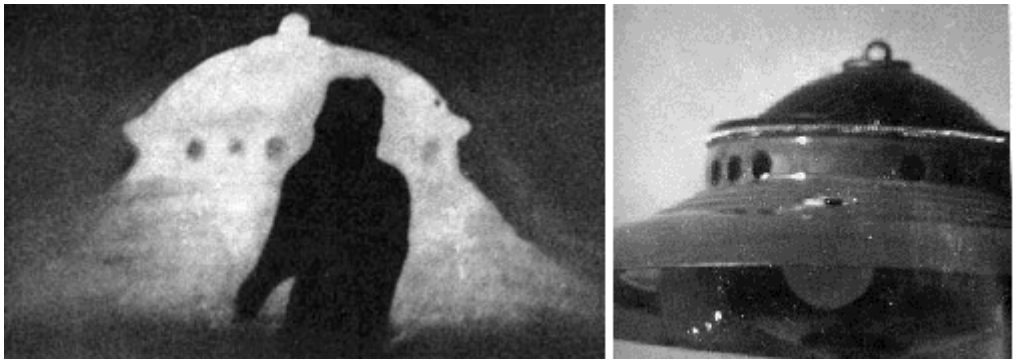
ただ、それでもアダムスキー型円盤、つまり釣鐘（つりがね）型のものが、いまだに典型的なＵＦＯの形状として知られているのは、コマーシャルや漫画の世界でも今でもよく描かれているのが主な要因かと思いますが、実際に鳥や虫、そしてレンズのピンボケによる飛行機のライトなどが、ちょうどキノコ型に見えてしまうことから、「アダムス

キー型ＵＦＯを見た（撮影した)」という誤認報告が後を絶たないからでもあるでしょう。下の写真は、左から、鳥、昆虫、飛行機のライトです。

では、そもそもアダムスキー型ＵＦＯというのは、最初から存在しない可能性もあるのでしょうか？　ＵＦＯを数え切れないほど目撃してきたというある人は、アダムスキー型ＵＦＯの（本物の）写真が撮られたことは一度も無く、そのようなものは存在しないと断言していたこともありました。

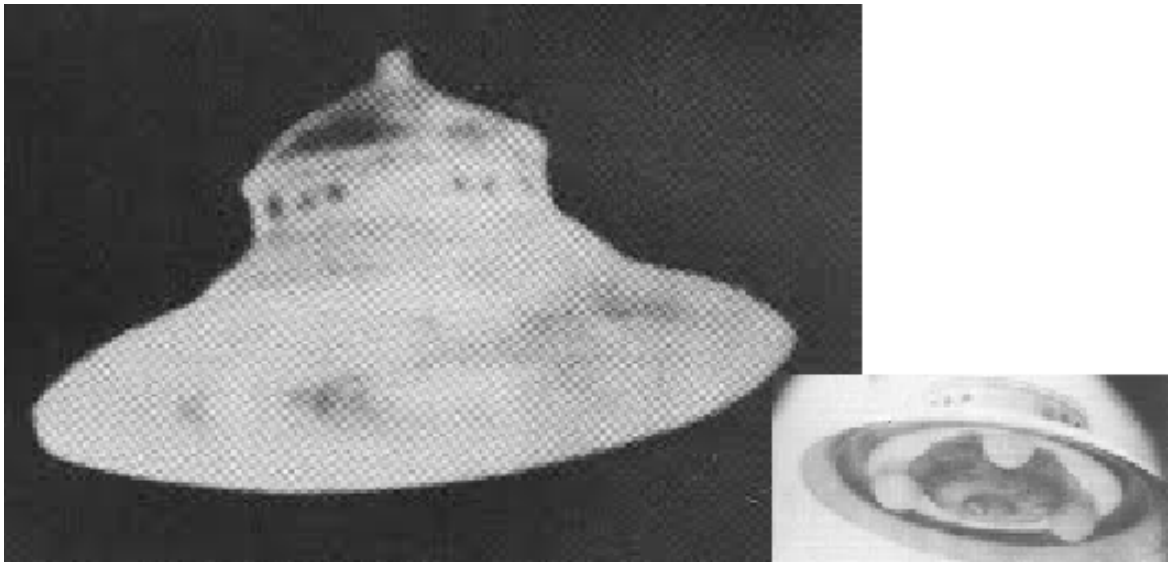
私はそこまで断定はできませんが、これまで何度もご紹介してきたハワード・メンジャーが遭遇し、撮影してきた（さらに搭乗してきたという）宇宙船もアダムスキー型ですが、なぜかメンジャーの場合も、本家アダムスキーのものとは微妙に形状が違います。

下の写真は、左がメンジャーのＵＦＯ、右がアダムスキーのものです。

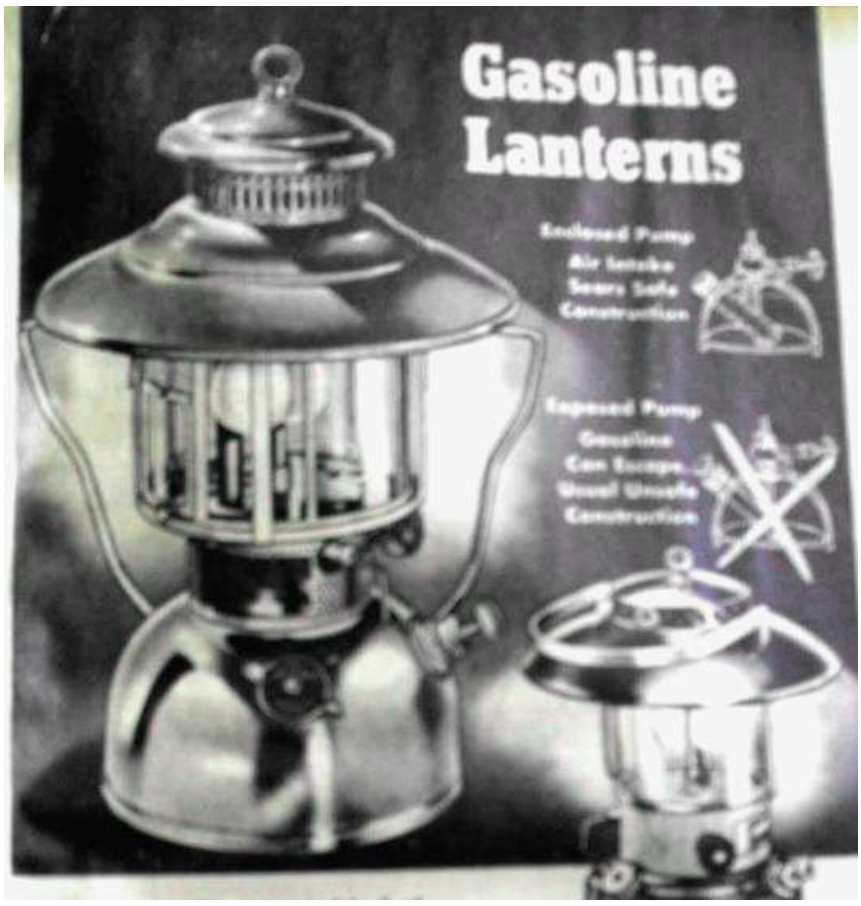


比べてみると、メンジャーの円盤のほうが少し縦長であることがわかります。

次の比較写真を見ると、さらによくわかります。左側がメンジャー、右下がアダムスキーのＵＦＯ写真です。



ところが、以前にもご紹介しましたが、１９３０年代から発売されていたランタンにも、少し縦長のタイプと、通常の（アダムスキーの写真に似た）形状の２種類が偶然にも存在しているのが、以下の広告で分かります。



今回の検証について、私がもう少し、いや１０年以上前にもっと真剣に、そしてもっと懐疑的にロドファーフィルムを見ておくべきだったと反省しました。高梨氏にも申し訳ない気持ちになります。同時に、私が１０年前の段階で今回と同様の考察ができたとしても、初期の円盤写真のランタンとの一致には気づけなかったことと、ハワード・メンジャーへの取材によって政府からの協力要請の可能性を知ることもまだなかったことを考えると、なぜフィルムだけが疑わしいのか、悩んでいただろうと思います。

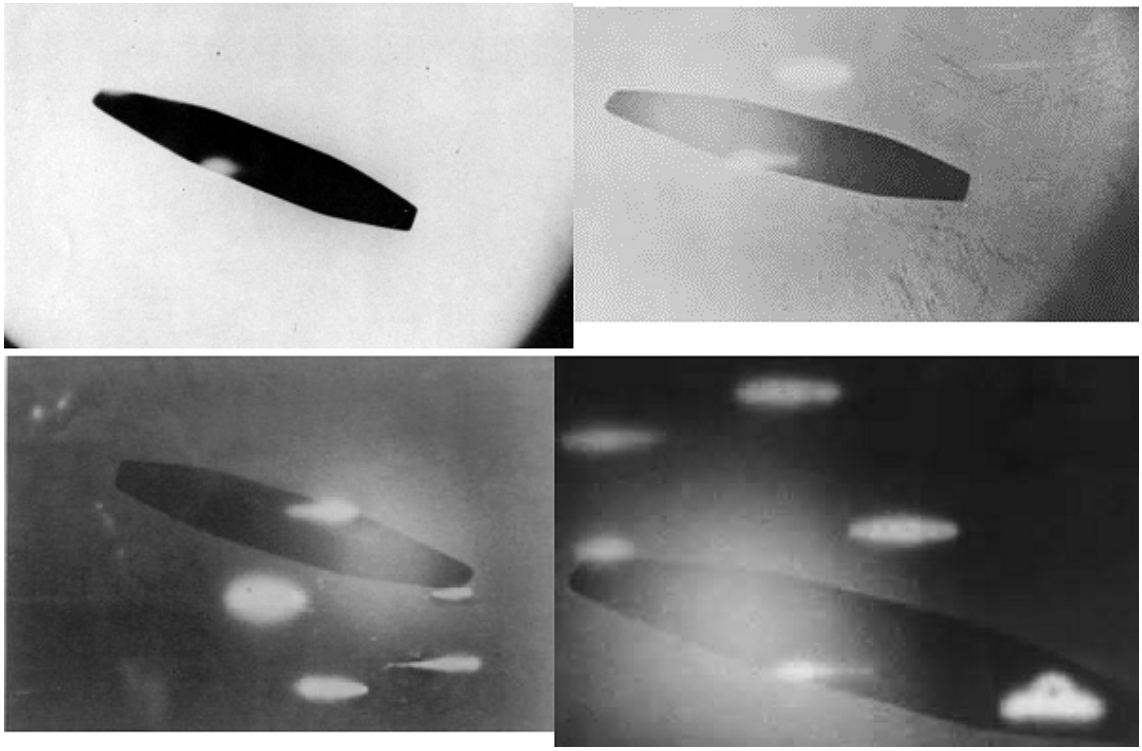
当然ながら、そういうアダムスキーを本物だと認めるオムネク・オネクに対しても、１０年前にフィルムの疑惑だけを検証していたら、オムネクの本を日本で紹介することは控えただろうと思います。いちおう、オムネクの本が次に増刷される際は、アダムスキーの円盤写真や映像について、訳者の見解が変わったことは追記しておいてもらう予定です。

それから、これもある意味では残念なことですが、前述しましたように、２０１５年７月に、１９９３年の高梨氏のテレビ出演動画を初めて拝見した際に、アダムスキー派として登場した韮澤氏が高梨氏の指摘をきちんと受け止めることをせず、それをその後に自身で再検証する試みもしていなかった（と思える）ことは、アダムスキー支持者たちにとっても不幸なことだったと思います。

このテレビ番組における他のＵＦＯ映像の検証において、ある人が車のフロントガラスから撮影した小型ＵＦＯと称するものが、背後の車からバイクのライトの可能性が極めて高いという指摘を他の出席者から受けながら、アダムスキー派の人たちが苦し紛れの反論をしていた姿を見た際は、「ああ、彼らは２０年前からこうだったんだな」と、寂しい気持ちになりました。撮影者のカメラの手ブレの動きが、フロントガラスから見える光（ＵＦＯ）の移動の軌道とピッタリ一致していた（つまり、その光は実際には動いていなかった）ことを指摘されても、彼らはそのことは無視し、「ライトはフロントガラスにはあんなふうに写らない」とだけ言い張るありさまでした。これでは、高梨氏の指摘を誠実に受け止めることなど期待できるはずもありませんでした。

番組収録からおよそ４年後に高梨氏は逝去なさりました。あらためて、氏の業績に敬意と感謝を捧げたいと思います。

今回取り上げたアダムスキーのＵＦＯ写真とビデオがほぼ１００％ニセモノに間違いないと私が結論づけたとしても、まだ彼がコンタクト前に撮影した母船と小型偵察船群の写真（以下のもの）などの検証はできていません。否定派は、「母船が平べったく写り過ぎている」といっているそうですが、そこのところはまだ私にはよくわかりません。



そして何度も申し上げるように、政府からの協力要請の可能性もあり、月面の決定的な写真をあえて非公開にしていたというキャロル・ハニーの目撃証言も残ったままですので、それらのことを知らない否定派の人達と同じ種類の単純明白な結論でアダムスキー問題を締めくくることは私にはまだできません。

ただ正直なところ、アダムスキーの信ぴょう性の証拠とされる代表的な円盤写真と８ミリフィルムの二本柱がニセモノに間違いないであろうと分かった今、もし私が自分自身で２０１０年と２０１５年にＵＦＯ映像を撮影していなければ、ＵＦＯの存在自体を疑ってしまっていたかもしれません。そして異星人らしき人達との遭遇体験を個人的にしていなければ、地球社会に紛れて活動しているスペースブラザーズやシスターズの存在自体も疑っていたかもしれません。

そう考えれば、自己都合の解釈となってしまいますが、アダムスキーの証拠映像の本格検証が遅れてしまったことは、タイミングとしては好都合だったともいえる気がします。

しかし、今後はどのようなことに対しても、きちんと中立的な立場で、懐疑的な視点も忘れずに、検証をしていきたいと思っています。